

関門コネクション



門司港駅、午前九時。

男はいつものように駅の売店で新聞とラークを一箱買うと、海峡を見渡せるカフェに向かった。

海に面したカフェテラスに腰を下ろすとコーヒーを注文し、タバコに火をつけ、陽光を照らし出す潮の流れをジッと見つめだした。晴天の日の男の日課だった。

8月の太陽は男の体を容赦なく照らしつけた。冷暖房の効いた店内でコーヒーを飲めばいいものを、男はいつもそれを拒否していた。そしてその表情からは怒り、喜び、悲しみなどの感情が欠落していた。

男は仕事以外での他人との接触を、できるだけ避けていた。男は探偵だった。いやむしろ『整理屋』と、言った方が正しいかもしれない。

男女関係の縫れ、金銭トラブル、事故処理、男はどんな難解なトラブルも表情変えずに対処していた。その無表情な顔から、理路整然とした言動がはかれ、時折見せる鋭い眼光は交渉相手を威嚇するには十分な武器だった。

最初のごねていた相手も最後は諦めにも似た気持ちで男との交渉につくことが多かった。そんな男にも、仕事で譲れないことが一つあった。

『法に触れる仕事は受けない』

それは男の掟だった。

男の仕事ぶりを聞きつけ、法外な手数料を出すと提案もあったが、それが少しでも法に触れる危険性があると解れば、男は仕事を受けなかった。男はその日が暮らしていければそれで良かった。欲望というものをどこかに置き去りにしていた。

太陽が照らし出す潮の流れを見ていた男は、運ばれてきたコーヒーに手を伸ばした。そして、駅の売店で買った新聞を読みだした。そんな男の顔に一瞬、驚きの表情が浮かんだ。

男の目に新聞のある記事が留まったのだ。男は飲みかけのコーヒーをテーブルに置くと、食い入るようにその記事を読み出した。

『麻薬王の息子 謝罪の旅。暴力の連鎖止めたい』

1970年代から90年代にかけて、南米コロンビアで「メデジンカルテル」と呼ばれる犯罪組織があった。その組織のボス、パブロ・エスコバルの長男が、父親の犠牲になった遺族に謝罪の旅をしているという内容だった。

男は記事を読み終え、新聞をテーブルに置くと、海峡に視線を戻した。

「あれから20年か・・・」

男はポツリと呟いた。

男の脳裏に海峡の底に封印していた過去の事件の記憶が蘇ってきた。

そして、その顔には今まで他人に見せたことがないような哀しげな表情を浮かべていた。

*

1989年2月4日付け朝刊

『アジア航空908便 バンコク発福岡行ジャンボジェット機、タイ上空に消息を絶つ！日本人乗客多数不明！』

新聞の一面は、この事故の様子を詳細に報道していた。だが、事故の原因が、機体の異常か、機長の操縦ミスか、あるいは過激派によるテロなのか、事故機の発見されていない現状では、謎のままだった。そして亜熱帯の空に消えた日本人乗客の大半がビルマ戦線で玉砕した肉親の霊を弔うために戦地を訪れた老人達だった。

小林正男は机の上に足を投げ出し、椅子の背にそっくり返って新聞を見ていた。そして記事を読み終わると足もとに投げ捨てた。

” その短い足がよく組めるな” 誰かが、小林に言ったことがある。小林はその言葉を思い出し足を眺めていた。胴長短足ガニ股。高度経済成長は、小林の体に恩恵をもたらさなかった。

小林は椅子から立ち上がると窓辺に近づき外の様子を眺めた。

「また降ってやがる。」

小林は呟いた。雨の多い2月だった。

昭和天皇の崩御を悲しむように、季節外れの梅雨前線が、すっぽりと日本列島を包みこんでいた。冬の到来を告げる粉雪はみぞれに変わり、アスファルトをただ濡らすだけだった。

九州の最北端に位置している門司港という港町の朽ちかけた三階建てのビルの一室に小林は住んでいた。

源平合戦の舞台、武蔵・小次郎の戦いの場となった巖流島を擁した関門海峡にのぞんだこの街は、明治の半ばの鉄道の建設、それに伴ったエネルギー革命が、筑豊を背景にした石炭の輸出港として街を活性化させていった。そして、日清戦争を境にして、心臓が体内に血液を送りこむように、兵士達を大陸に送り出していくようになる。その間、勝ち戦の続いた日本は、昭和という時代を迎える。

大和魂たちは、兵士・民間人を問わず、この港から大陸へと進出して行き、そのなかで、街は、軍事基地としての重要性をますます高めていった。しかし、太平洋戦争の最中、アメリカ空軍の恰好の爆撃地帯となり、焼夷弾の雨が街を死の街と変えてしまう。

敗戦後、海は交通路の主役を空にゆずり、街も長距離トラックの排気ガスのなかで静かに息づいている。

しかし、戦火を逃れた時代遅れの建物だけが、過去のこの街の繁栄を物語っている。だがそれも、レトロブームのなかの、人々の感傷にその運命を託していた。

*

「ただいま帰りました」

田島だった。

田島は、小林の使いばしりをしている青年で、小林の得意先を回って集金をするのが仕事だった。無口で不器用で愛想もよくないが性格は真面目な男で、一度思いこむとそれが正しかろうと正しくなかりと、決してゆずらない信念の持ち主でもあった。

すなわち頑固ものだ。自分の思ったことがうまく表現できずに、戸惑うことも多かったが、生きていくのにさほど困っている様子でもなかった。

「銭は取れたか」

小林は言った。

「ええ、まあ」

田島は口ごもった。うまくいかなかったとき、田島は返事を曖昧にする。

「だめか」

「はい。月末には払うから待ってくれって言うんです」

「月末、月末って、俺は半年も待っているんだぞ」

小林は怒鳴った。

「それじゃ困るって言ったんですけど、サツに話すって脅かすんです」

「タヌキじじいめ。ふざけやがって。痛い目にあわせないといけないな」

「誰がやるんですか。まさか、俺じゃないでしょうね」

田島は困惑した顔で小林を見た。

「田島。俺達は慈善事業で商売をやっているんじゃないんだ。たまには危ないこともやらないと、世間になめられちゃうんだ、と言いたいところだが、平和主義の俺としては、タヌキの言葉を信じるしかないな」

『私設場外馬券業』—小林のビジネス。

いわゆるノミ屋だ。

小林は、ノミ屋を始めて三年になる。

競馬狂いで、サラ金に手を出し、勤めていた役所もクビになり、家族からも見放されて途方に暮れていた小林に助け船をだしたのが、小倉競馬場で知り合った『金さん』だった。

金さんは、小林の借金を清算して、仕事までも世話してくれた。その仕事が、金さんのやっていた『ノミ屋』だった。

小林が、ノミ屋稼業に精をだして間もなく、金さんは警察の世話になった。

そして、

『二年の実刑判決』

しかし、罪は『ノミ行為違反』ではなく、『覚醒剤取締法違反（使用）』だった。

『俺がムシヨを出すまで、後のことは頼んだぞ』これが、金さんの最後の言葉だった。

そして、金さんは獄中で地獄へと旅立っていった。

小林はそれ以来、金さんの意志を継いでノミ屋稼業を続けている。

全くこの仕事は、俺には合わない。だいたい法の裏で銭儲けするほど、俺は腹がすわっていない。小林は、ふと、そんな事を考えた。

時計を見ると、四時前だった。

（そろそろ出かけないと、いけないな）

「田島。俺は出かけるから、あとは適当に帰ってくれ」

小林はそう言い残すと上着をつかんで部屋を出た。

ビルの外に出ると、雨はすでにやんでいた。

だが、青空が顔を覗かす様子が見えず、低くたれこめた雲は、暗く・重く、街にのしかかっていた。小林は、ビルの向かいの駐車場に停めてある車に乗りこんだ。

1970年フォード・マスタング

アメリカが、車の世界で栄光を誇っていた時代のサラブレッドだ。アメリカのかつての栄光も、今や、クズ鉄同然のポンコツに成り下がろうとしている。

夢は破れ、世界は変わり、栄光は輝きを失い、時代は過ぎ去っていく。

『表に車が置いてある。支払いの変わりだ』

ある日、小林の事務所に男から電話があった。小林が急いで表に出てみると、鉄屑の固まりが、ビルの出口を塞ぐように歩道に乗り上げられていた。車内を覗き込むと、キーが差し込まれたままになっていた。小林は車に乗り込み、イグニッションキーをひねった。

その動きに合わせて老いたサラブレッドは二度・三度、ブル・ブルと鼻を鳴らし、競走馬としての本能に目覚めた。

そして『汽笛』が、港中にこだました。

それ以来、このポンコツは、小林の足代わりをしている。

小林は駐車場から車を出すと、関門トンネルに向かった。

山口県の山陰沿いにある『和田』という日本海に面した漁村の外れで、レストランをやっている『宮野』から、今日の昼間に電話があった。

『金が、できた。五時に取りにきてくれ』

急な、電話だった。

いつもは、小林の口座に振り込んでくるのに、今回に限って集金に来るように言ってきた。

宮野とは門司港にある洋食専門の大衆食堂が取り結ぶ縁だった。

大陸景気のときに建てられたその店は、決して清潔とは言えなかったが、安くてうまいという評判の店だった。そして年代ものの鏡やテーブルが、客を過去へといざなった

。

小林は何度かその店に食事に行くうちに、そこで、コックをしていた宮野と知り合った。

この職業にありがちな短気な性格の宮野は、三度の飯より賭博好きで、自然に小林のお客になっていった。

三年前、宮野は独立して今のレストランを始めた。フランスで料理の修業をただけのことはあって腕前は確かだったが、山陰沿いの村ではその腕をふるうチャンスもなく錆びついていくばかりだった。店のほうも夏の海水浴シーズンに客が迷い込んでくるだけで、冬は閑古鳥がなっていた。そして、店の暇なときには釣り客を相手に船をだしたりしていた。

門司港では止んでいた雨も、関門トンネルを抜けて下関に出ると、ワイパーが必要だった。

トンネルの出口で道は3つに分かれている。

小林は国道2号線に向かって車を走らせた。

ここから目的の『和田』まで、1時間も走れば到着する。途中の交差点を左に折れ、幹線道路から外れて峠道に入る。

この峠道は、『農免道路』と呼ばれていて、地元の間が頻繁に使っている近道だ。農免道路にはいって、何度かアップダウンを繰り返すうちに、雨はいよいよ本降りになってきた。

ワイパーを強にして、フロントガラスに叩きつけてくる雨をはじきとばしているが、間断なく降りつづける雨の軍団には、さほど効果があがらなかった。まだ5時前だというのにすでにあたりは薄暗く、おまけに霧も差し込んできた。小林はヘッドライトを早めにともすと注意深く車を走らせた。

いつもなら、80キロ平均でとばせる道も、悪コンディションが重なったために40キロ程度しかスピードをだすことができなかった。

(かなり時間が、かかりそうだな)

小林はかんでいたガムを吐きだそうとウィンドウのノブに手をかけたが、外の雨を見てその考えを諦めた。そして、灰皿を引っ張り出し、上着のポケットから、くしゃくしゃになったレシートを取り出すと、かんでいたガムをそれに丸めて灰皿に突っ込んだ。

小林はタバコを止めて3ヶ月になる。

しかし、こんな状況が一番危険だ。無性にタバコの味が恋しくなる。それはニコチンが彼の体に、依然として、取りついたままだったからである。

小林は車のダッシュボードを開けると封のしてあるガムを取り出し、無造作に一枚口の中に放り込んだ。こんな時のために、車の中にはいつもガムを用意していた。だが、それが気休めにしかない事も小林はわかっていた。

それは、タバコを完全に放棄できるほど、彼の意志が強くはなかったからだ。そしてその事を、彼が一番知っていた。

峠のコーナーをいくつか抜けると、ヘッドライトの先で霧に包まれた白い自動車が浮かび上がってきた。スピードを落として、車のそばを通りすぎようとした小林の視界に、車の前部に隠れるようにうずくまっている人影が見えてきた。

(事故か！)

小林は車を急停止させると、マスタングの中を見回した。

「カサなんて、しゃれた物を俺が持っているわけないか」

ひとりにやつくと雨の中に飛び出していった。

「どうしたんだ」

女だった。降り続ける雨が、女の長い髪をべっとりと濡らしていた。

「どうしたんだ。ひかれたのか」

小林は女の肩に手をかけた。

「違うんです。ひいたんです」

女は降りしきる雨の中で、目を細めて小林を見上げた。

「何をひいたんだ」

小林は屈み込み、女が大事そうに抱えているものを取り上げた。

「なんだ、子犬じゃないか」

それは、生後間もない茶色の子犬だった。

「ひいたんです」

女は言った。

「そうか、もう死んでしまってるぞ」

小林は言った。

「ひいたんです」

女は、また言った。

「ひいたのはわかっているけど、もう死んでしまっているんだ。あんたがいくら悲しんでも、この子犬は生き返らないぞ」

小林はやさしく言った。

「でも、ひいたんでんです」

「ひいたのはわかってるって。だけど悲しんだからどうなるっていうんだ。そうか、わかった。あんたが殺したんだな。あんたがひき殺したんだな」

小林は意地悪く言い放った。

「そんな言い方をしないで下さい」

女は悲しそうな瞳で小林を見つめた。

大きな瞳からは今にも涙が溢れてきそうで、小林は切ない気持ちになってきた。

「悪かった。俺が言い過ぎた。だけど、いつまで悲しんでも、どうにもなりはしないぞ」

「埋めます」

女は言った。

「埋めるって、どこに埋めるんだ。このどしゃぶりの中を、あんた一人でどうやって埋めるんだ。そんなこと考えないで、このままほっとくんだ」

「そんなこと、出来ません。私がひいたんです。持って帰って埋めます」

(なんて強情な女だ) 小林は思った。

「わかった。あんたの好きにするがいい。もう、お節介はやかない」

小林は、子犬を女に渡すと車に戻った。マスタングのドアを開けて乗り込む前に、もう一度女を見た。女は相変わらず子犬を抱いたまましゃがみこんでいた。

「しょうがねえな」

小林は呟くと、また、女の方に戻った。

(いつだってそうだ。女は男を悩ませる。そして、男はそれを楽しんでいる)

「俺が代わりに埋めよう」

「そんなこと頼めません。ほっといてください」

「美人をほっとけるほど、俺は強くはないんだ」

「ほっといてください」

「ほっとけないんだ」

小林は女とのやりとりを楽しんだ。

「でも、頼めません」

「頼まなくたっていい。俺が、お願いしてるんだ。」

小林は、嫌がる女の手から子犬を強引に取り上げた。小林の力に女は諦めて子犬を放した。そのとき、小林は女をじっと見つめた。

化粧は雨で落ちていたが、男の心にせつなく訴える大きな瞳が虚ろげに輝いている。

(こんな瞳で涙ぐまれたら、俺はどんな言葉をかけたらいいいんだ。どんな態度をとったらいいいんだ)

「俺が代わりに埋めよう」

小林は言った。

「でも、悪いです」

「悪くなんかない。俺のおせっかいだ。早く車に乗ることだ。ずぶ濡れじゃないか」

「でも・・・」

「早く乗らないと、俺まで風邪をひいちゃうぞ」

「すみません」

女は抵抗するのをやっとなめて。そして、ゆっくりと立ち上がった。濡れた長い髪が女の細い首筋にべっとりとまとわりついていて、小林は、そのまま女を抱き寄せてその髪をはらってやりたい衝動にかられた。その間も絶え間ない冷たい雨は、二人の体を容赦なく濡らしていた。ヘッドライトに浮かんだ女のずぶ濡れの全身が、小林の下半身にあつい血を逆流させた。だが、それも芯まで冷え込んだ体のせいで長くは続かなかった。

。

「早く帰るんだ」

小林は女を促した。

「でも悪いです」

「何度言ったらわかるんだ。俺はおせっかいでやってるんだ。それとも二人でホテルにしけこんで熱い風呂に入りベッドで愛しあうかい。子犬をひいたことなんかきれいさっぱり忘れちゃうぜ。今のあんたには、そのほうが必要かもしれないな。あんたは冷えきった体のせいでまともな考えが出来ないんだ」

小林は一気に喋った。

「そんなことはありません」

小林は、女の大きな瞳がにじんでいるのがわかった。頬を伝わるものが、涙なのか、絶え間ない雨なのか、小林は考えた。

「さあ、早く車に乗るんだ。あんたが、あくまで強情張るなら、俺はこの犬を崖から投げ落とすぜ。そうすれば、あんたがここにいる理由もなくなるはずだ」

小林は女に車のドアを開け、乗るように促した。

「あんたと別れるのはなごり惜しいけど、もうこれで終わりにしようぜ」

「すみません」

女は力なくおじぎすると、車に乗り込んだ。小林は、女が乗り込むのを待ってドアを閉めた。女は車の中で、もう一度小林におじぎをすると、ゆっくりと車をだした。小林は、車のテールライトが峠のコーナーで隠れてしまうまで、車を見つめていた。

（麗しの瞳か。どちらにしろ、美人は得か）

小林は一人納得すると、抱きかかえていた子犬を見た。苦しんだ様子も見えない安らかな顔を見ていると、とても死んでいるとは思えなかった。きっと車に当たったショックで天国へと旅立ったのだろう。無慈悲な神は汚れを知らないものほど、早く自分の元に呼ぼうとする。小林は子犬の死体を峠の下に投げ落とすと、胸の前で十字架を切った

。

「アーメン」

そして急いで車に乗り込んだ。

「ちきしょう。パンツまでびしょ濡れだ」

小林は愚痴ると、ギアをローにたたき込みアクセルを踏み込んだ。すると、タイヤの空転で尻がもぞもぞした。

峠の道を抜け、国道に合流すると、海が見えてくる。海岸沿いのこの道は、信号もなく対向車も少ないために、かなりスピードを出すことが出来る。

雨はだいぶ小降りになっていたが、強い風のせいで、岸壁に打ち寄せる波が砕け散り、車のフロントガラスを濡らしていた。

（このぶんどと、時間どおりに着けそうだ）

宮野のレストランは、入り江の高台の上にある船をかたどった二階建ての白い建物だった。

しかし、吹き付けてくる潮風のせいでその色も褪せ、ポーチの手すりもペンキがはがれおち、錆びついた地金が、あちこちに顔を覗かせていた。

小林は国道をそれて、入り江沿いに車を走らせると高台の駐車場を目指した。マスタングはぼろぼろの車体をぶるぶるとふるわせながら、急斜面の坂を爆音と共に一気に駆け上がった。小林はマスタングのアイドリングを整えるために、アクセルを強く踏み込んだ。

そして静かにエンジンを切った。トルクのバケモノが産み出す、ノイズと振動の世界から解放されると、潮の匂いと波の音が体に心地よく伝わってきた。

駐車場には、宮野のワゴンのほかに白いライトバンが停めてあった。

小林は車をロックすると、レストランに向かって早足で歩き出した。雨はすでに止んでいたが、冷たい空気が、小林の雨で濡れた体を何度も寒さで震わせた。

「えらく、寒そうじゃねえか」

宮野は玄関の外で小林を待っていた。細身の体に淡いオールドブルーのダウン一枚という軽装が、店の中の暖かさを小林に訴えてきた。

そして油のしみがこびりついた白いエプロンが、宮野の職業を物語っていた。

「わざわざ、出迎えとは気が利いてるじゃないか」

小林は言った。

「あなたの車は音はまるでカミナリだぜ」

宮野はマスタングの方を指さした。そして、吸っていたタバコを投げ捨てるのと小林に耳打ちした。

「中に客がきてる。裏口にまわってくれ」

宮野は小林にそう言うと店に戻っていった。

（いつの世も、借金取りは疎外されるか）

小林が、冷えきった体を両手でかかえこみ言われた通りに裏口にまわると、すでに宮野が調理場の扉を開けて待っていた。

「入ってくれ」

調理場の中は、ガスの熱で空気があったまり、冷えきった小林の体をじんわりと包みこんできた。

「ここは天国だぜ」

小林はおもわずつぶやいた。

「びしょ濡れじゃねえか。とうとう、車の屋根まで腐っちゃったか」

宮野は棚からウイスキーを取り出しグラスに注ぐと、小林に差し出した。

「ありがたい」

小林はグラスを受け取ると一気に飲み干した。すると熱い液体が胃の中でサンバを踊り出した。

「生き返ったようだ」

小林がからのグラスを調理台の上に置くと、宮野は、また、ウイスキーを注ぎ込んだ

。

「好きなだけ飲んでくれ」

そして、胸のポケットから束になった福沢諭吉を出すと、台の上に置いた。

「十枚ある。とってくれ」

「貸しは八万のはずだ」

小林は一万円札を眺めた。

「実は、頼みがあるんだ」

「頼みは聞けない」

「簡単なことなんだ」

宮野は小林のグラスに酒をつぎ足すと勝手に話し出した。

「今夜、船を出す。それで一緒に乗って欲しいんだ。あんたは、何もしなくていい。一緒に乗ってくれさえすればいいんだ。二時間でいい。二時間、船に乗ってくれればいいんだ。あんたは、それで、二万円稼げるんだ。悪い話じゃないだろう」

宮野は一気に喋った。

「俺は、夜、仕事はしないんだ」

「なにも難しいことじゃない。船に乗るだけだ」

「だめだ。夜は仕事ができない。親父の遺言だ」

「それで、いくらなら、引き受けてくれるんだ」

宮野は小林の言葉に耳を貸さなかった。

「さっきも言ったとおり、俺は、夜は働かないんだ」

「三万じゃどうだ。二時間で三万だぜ。ソーブランド並みの稼ぎだぜ」

宮野はニヤニヤしながら言った。

「だめだ。親父の遺言は破れない」

「五万出そう。それなら文句なしだ」

宮野は決めつけた。

「いくら言ってもだめなものはだめだ。用も済んだようだし、俺は帰る」

小林は一万円札を八枚だけ抜き取ると、ズボンのポケットに突っ込んだ。

「待ってくれ。頼む、待ってくれ」

宮野は小林の肩を押さえた。

「店に客がきてる。二人連れだ。五十万、出すから、船を、牛島沖まで出すように言ってきた。牛島沖なら二時間もあれば、往復できるところだ。その船と一緒に乗ってくればいいんだ。簡単な仕事だ」

宮野はため息まじりに言った。

「簡単な仕事なら、一人でやればいい」

小林は冷たく言い放った。

「そんなこと言わずに手伝ってくれ。一人じゃ心細くて仕方ねえんだ。客の一人のほうは、黙ったまま何もしゃべらねえし、夜だっていうのに黒メガネなんかしやがって、人相もなにもわかりやしねえ。おまけに、もう一人のほうは、ニヤニヤ笑うだけで、気味が悪いったらありやしねえ。二時間でいいんだ。一緒に船に乗ってくれ」

「とにかく、俺は、だめだ。他をあたってくれ」

「他にあてがあるようなら、あんたを門司から呼びはしねえよ。こんなことなら、引き受けるんじゃないかった」

「じゃ、断るんだな」

小林はそう言い残すと、裏口から外に出ようとした。

「待ってくれ」

宮野は、くしゃくしゃになったサムタイムを尻のポケットから取り出すと袋を引きちぎり、最後の一本に火を点けた。そして、深くタバコの煙を吸い込んだ。

「実は、あんたに言ってなかったけど女房に子供が出来ちゃったんだ。それで、どうしても金が必要なんだ」

宮野の表情はさっきまでまでの笑いがなく、悲壮感さへ浮かんでいた。

「本当のところいくらもらったんだ」

小林は宮野を問い詰めた。

「百万だ」

宮野は観念して言った。

「船を出すだけで百万か」

「そうだ」

宮野は答えた。

「いや、口止め料も含んでる」

宮野は考え直して言った。

「犯罪がらみの仕事なのか」

「詳しいことは、聞いていない」

小林は宮野から、それ以上聞き出そうとしなかった。また、知っていても何も喋らないだろうと思った。

(なにをぐずぐずしているんだ。急いでこの場を立ち去り、マスタングの爆音の中に体をあずけるんだ。そして、いつもの酒場で人生の安らぎを求めるんだ。犯罪は『ノミ行為』だけでたくさんだ。これ以上、やっかい事をしよいかいこむほど、おまえの神経はタフじゃないはずだ)

天の声が小林に囁きかけてくる。

「三割もらおう」

好奇心と金の魔力に人間は安楽を失ってしまう。

「三割は多すぎる。せめて、二割にしてくれ」

「おまえも俺も危険は半々だ。これでも安いぐらいだ」

宮野は、目を閉じて考え事をしていたが、結局、それも徒労に終わった。

「わかった。三割だそう」

宮野も小林の要求を蹴ってしまうほど、身の安全の確信がもてなかった。

「船の時間は十時だ。それまで奥で休んでいてくれ。着替えと食事は後で持って行く」

「その前に、まず酒が欲しい」

小林は言った。

着替えと食事を済ませ、寒さと空腹から解放されると、アルコールが小林に疲労と睡魔を呼び起こした。

（船を出すだけで百万。誰が考えてみても、まともな話とは思えない。犯罪が絡んでいるのは間違いないだろう。海の上で、奴らは何をやろうとしてるんだ。密輸の海上取引か、だとすれば、なぜ、奴ら自身が直接やらない。第三者を巻き込むなんて、どう考えてもおかしな話だ。それとも、宮野も仲間か？いや、そんなことはあり得ない。ありえるはずがない・・・）

小林は浮かんできた疑惑を打ち消すために、残っていたウイスキーを一息で飲み干した。ぼんやりした頭でいろいろな事を想像するうちに、小林は不安な気持ちになってきた。

(もう、これ以上考えるのはやめにしよう。無駄だ。所詮無駄な事だ)

小林は不安な気持ちを抑えるために、女のことを考えることにした。

雨の中で出逢った女。白く細い首にまとわりついた長い髪。その髪を両手でやさしくかきあげ、濡れたブラウスからほのかに透き通って見える乳首を、舌で弄ぶために、ブラウスのボタンをもどかしげにはずしてゆく。痩せた体からは、想像もつかないような、ふくよかな乳房が現れてくる。その乳房をゆっくりと持ち上げ、口の中に乳首を含み甘酸っぱい感触を味わう。そして、時折、軽く乳首を噛んで、女の痛がる顔を楽しむ。

女の痛がる顔が殺気に変わったかと思うと、小林の頬に平手打ちがとんできた。

「船の時間だ。起きてくれ」

宮野が小林の頬をたたいていた。

「不機嫌な顔をしているな。その分だどろくな夢でも見なかったらしいな」

(なんという無慈悲な男だ。お前のために、俺は女に殴られたんだ)

小林はうらめしげに宮野を見つめた。

「いつまでも、寝ぼけた顔をしてないで、これを着てくれ」

宮野は小林にゴムの雨合羽を手渡した。

「船で待ってる。顔を洗ったらすぐに来てくれ。奴らがうるさい」

(奴らがうるさい。待たせればいいんだ。人の濡れ場の邪魔をしゃがって、ふざけた事を言うんじゃない)

朦朧とした頭が、だんだんはっきりしてくるにつれて、小林は不安な気持ちになってきた。

(そういえば、俺は奴らの顔も知らない。奴らとは一体どんな悪党なんだ)

小林はたいぎそうに合羽を着込むと、大きくため息をついた。そして、ゴム長をはくと、重たげな足取りで駐車場に向かった。

船着き場までは車で二分とかからなかった。

船着き場のほの暗い街灯の下で男が一人タバコをふかしていた。震える寒気の中でタバコの煙が立ち上り、裸電球の方にゆらゆらと吸い込まれていった。

「準備はできてる。急いでくれ」

宮野は、吸っていたタバコを海に投げ捨てると、漁船を繋いでいたロープをほどき船に飛び乗った。

「早くしろ。船が出ちまうぞ」

宮野は小林に怒鳴った。

小林は慌てて船に飛び乗った。しかし、乗った瞬間にゴム長がすべり、船のへりで頭を打ち付けた。

「大丈夫か」

宮野が心配げに声をかけた。

「ああ、なんとかな」

小林はずきずきと痛む頭を右手で押さえた。

すると、べっとりと手の平に血が滲んできた。

（なんてこったい。この分だと先が思いやられるぜ）

小林が自分の不運を呪っていると、船の後部からへらへらと笑う声が聞こえてきた。

「なにがおかしいんだ」

小林は笑い声の方を振り向いた。

そこには男が二人船のへりに腰掛けていた。

一人の男は小林を見ながらニヤニヤと笑っていた。青い防寒具を着た小柄な男で浅黒い顔をしていた。もう一人の男の方は、サングラスをかけて顔の表情はつかめなかったが、白髪交じりの頭と皺の刻まれた顔が、男の年齢を物語っていた。そして、その初老の男は小林には無関心のようなだった。

こいつらなら勝てそうだ。小林は、小柄な男を見て思った。（だが、こいつが丸腰だという保証はどこにもない。逆らわない方がよさそうだ）小林は考え直した。

「さあ、船を動かすぜ。海に落ちないように気をつけてくれ」

宮野の言葉に小林は我にかえった。

和田の入り江は、沖の水平線に浮かんでいる牛島のおかげで、日本海の荒波の影響を直接受けることがなく、穏やかな表情を見ることが多かった。小林は、時折、後部にいる二人を見た。小柄な男は、相変わらずニヤニヤしているだけで頭が狂ってるんじゃないかと思われた。サングラスの男は、時間が気になるのかしきりに腕時計に目をやっていた。

ベタ凧の海を、牛島目指して走っていると、入り江の東の海上から船が一隻走ってきた。突然、轟音と共に火柱が吹き上がったと思うと、夜の海を深紅に染めて、その船が木っ端微塵に吹き飛んだ。一瞬、四人の乗った船が暗い海の上で、突風を受け大きく波打った。

「今の爆発はなんだ！」

宮野が叫んだ。そして、船を停止させた。

「船を止めるんじゃない」

後部から男が怒鳴った。サングラスの男が立ち上がって宮野を威嚇している。

「事故があったんだ。救助に行かないといけない」

宮野は男に言った。

「二度、同じ事は言わない。すぐに船を出すんだ」

男は、一語一語噛み殺すように言った。

「生存者がいるかもしれないんだ」

宮野は舵を事故の起こった方向に向けてスロットルレバーに手をかけた。

「勝手な行動は許さない。今すぐ舵を元に戻すんだ」

サングラスの男が怒鳴った。

宮野は男の言葉に耳を貸さず、スロットルレバーを倒した。宮野の腕の動きに合わせてエンジン音が高まり、船の舳先が持ち上がった。しかし、すぐにエンジン音は弱まり舳先も元に戻っていった。小林が宮野の方を振り向くと、小柄な男がへらへらと笑いながら、小林の恐れていたものを宮野の頭に突きつけていた。

「舵に戻すんだ」

サングラスの男が宮野に言った。

「俺は、ごたごたは望んでいない。だが、これ以上騒ぎを起こすようだと、お前達の命の保証はしない。いいか、わかったな」

サングラスの男は一語一語噛み締めながら、諭すように言うと、また船のへりに腰をかけ、海を見たまま黙り込んだ。宮野はしぶしぶうなずくとスロットルレバーを倒した

「あんたらの目的は何だ」

小林のかすんだ声は、震えていた。

だが、誰も小林の問いかけに答えてくれるような親切心を持ち合わせていなかった。

小柄な男は相変わらずニヤニヤしているだけで、そしてサングラスの男は海を見つめたままだった。

（奴らは一体何者なんだ。それに狙いはなんだ。いずれわかるだろうが……。とにかく、うかつなことは言えない。おとなくしていることだ。それにしても、とんでもないことを引き受けちまったもんだ）

「もうすぐ、牛島だ」

舵を取りながら、宮野が言った。

島の稜線が闇にぼんやりと確認できるほど、船は牛島に近づいていた。

「どこに向かうんだ」

宮野が怒鳴った。

「南東だ」

サングラスの男が言った。

宮野は男の指示で、舵を左に切りだした。

「どこまで走るんだ」

また、宮野が怒鳴った」

「もうじきだ」

「このままだと、大陸に着きそうだぜ」

宮野がぼやいた。

「あれだ！」

サングラスの男が突然叫んだ。

「あの船の明かりを目指して走るんだ」

小林が前方に目をこらすと、遙か彼方に船の航行灯が見えてきた。

「できる限り近づくんのだ」

サングラスの男は叫び続けている。

「あの船にぶつけちゃうのか」

「お前は言われた通りに走ればいいんだ」

宮野は、舵を左舷の方向から迫ってくる船に向けた。船の大きさや速度がわからないまま小型の漁船が、夜の海で航行灯だけをたよりに、船に迫っていくことは自殺行為のようなものだった。相手の船が確認できる位置まで来たときに、衝突の危険がないなどと誰にも断言できないだろう。

「どこまで近づけばいいんだ」

宮野が怒鳴った。

「お前は黙って俺の指示に従え」

「このまま進めば衝突するかもしれない」

「衝突しないようにうまく回避するんだ。そのために高い金を支払ってる」

「勝手なこと言いやがるぜ。命と引き換えに百万なんて、はした金じゃねえか」

船が近づくにつれ、相手の航行灯が目線よりだんだん上にあがってきた。かなり大きな船のようだ。

「よし今だ」

サングラスの男の指示で、小柄な男がよろよろしながら船の前部に歩いてきた。そして、手に持った携帯用サーチライトで、迫り来る船に向かってチカチカと照らし出した。

そして、相手の船からも合図が返ってきた。

「間違いない。あの船だ」

サングラスの男が叫んだ。

「いつまでこんな事をやるつもりだ。本当にぶつかっちまうぜ」

宮野が言った。

「もう少しだ。もう少しでこのショーも終わる」

こうしてる間にも二隻の間は迫っていた。

航海灯の明かりでぼんやりと船の全景が見えてきた。その船は、貨物船のようだった

。

（宮野。何を迷ってるんだ。ぶつかっちゃうぞ。こんな気違いの言葉なんか聞くんじゃない）小林は心の中で叫んでいた。

「よし、面舵だ」

サングラスの男が叫んだ。宮野はその言葉に反応して舵を右に切り出した。小林は相手の船も反応して同じ方向に曲がってこないことを願った。相手の船の舳先が視界から左の方に流れていきだした。

「あまり舵を切るんじゃない。相手の脇をすり抜けるんだ」

「無理だ。この暗さじゃ、距離感がつかめねえ」

「よし、そのまま舵を戻すんだ。そうだその調子だ」

男はさっきからの黙った様子とは違って、生き生きと宮野に指示を出していた。

（この男は海の男だ）小林は直感的に思った。男の指示には、自信が満ちあふれている。そして、他のものに安心感をおぼえさせる響きがあった。

船も男の指示したとおりに相手の貨物船と平行に向かい合うようになった。

「よし、そのままスピードを落として舵を戻すんだ」

「あんた、船乗りか」

小林の言葉に、男は、一瞬身を震わせたが何も聞こえないふりをした。

「ぎりぎりまで船を寄せるんだ」

宮野は男の指示に従いスロットルレバーを戻してスピードを殺し、舵を慎重に操作していた。目尻と額によった皺が、宮野の緊張を表している。

「よし、エンジンを停めろ。そのまま停止するんだ」

サングラスの男が宮野に言った。

（あの貨物船は、俺達の存在に気付いているのか。ひょっとすると何もわかってないんじゃないか。いや、こっちは合図を送ったんだ。知らないはずはない）小林の心に不安が募ってきた。

貨物船は、もう目と鼻の先まで迫っていた。

でかい。まるでビルだ。ビルが迫ってくるようだ。小林の背中に何度も悪寒が走る。貨物船のたてる波が、漁船を木の葉のように揺らし出した。

(時よ。このまま何事もなく過ぎてくれ)

小林の目の前を地鳴りのようなエンジン音をさせながら、鉄の壁が横切っていく。

黒っぽく塗られた船体の上の方に、白い文字で『九陵』とネーミングしてあるのが、航行灯の明かりで、はっきりと読むことができる。そして、貨物船の後部で数人の男達がうごめいていた。小林の頭上でその男達の姿がシルエットになった瞬間、船と船の隙間に何かが投げ落とされた。

「バッシューン」海水のシャワーが雨のように、漁船の上に降りかかってきた。小林は顔にかかったしぶきを手で拭い、海面に目を凝らした。すると、縦・横1メートルほどの木箱が、沈まないようにロープでブイに結ばれて海の上を漂っていた。

そして、その前を貨物船は何事もなかったかのように、悠然と雄牛のようにシリを見せて、立ち去っていった。

「あれを回収するんだ」

サングラスの男が木箱を指さした。

「船を木箱の横につける」

男は宮野に言った。宮野は慎重に舵を取り繰りながら船を寄せていった。

「よし、止まれ」

男は船から身を乗り出すと木箱に手かぎを打ち込んで手元に引き寄せた。

「みんなで船に引き上げるんだ」

四人は木箱を結んでいるロープに手をかけ甲板に引き上げようとした。

（重い。手が引きちぎれそうだ。一体何がこの中に入っているんだ）

木箱は船の縁にこすられて悲鳴のような音を出しながら上げられた。

小林は礼儀上、サングラスの男に質問した。

「何がこの中に入っているんだ」

「お前には関係ない」

男は言った。

（そう、俺には関係ない。予想した通りの答えだ。人は答えに都合が悪くなると『お前には関係ない』とつっぱねる。だけど俺は知りたいんだ。ガキのようにだだをこねても、この箱の中身が知りたいんだ。それに、俺には知る権利があるんだ。寒さを我慢して、ここまでのこのことついてきたんだ。それなのに、『お前には関係ない』と言って教えない。礼儀知らずも甚だしい。そう、俺はここに来るべきじゃなかった。アルコールに人生の意義を求めるべきだったんだ。そうすれば、他人の秘密に顔を突っ込まずにいられたんだ。そして、知りたいなんていう欲求も起こらなかつたんだ）小林は自分の行動を呪った。そして、自分の好奇心を呪った。

「さあ、引き上げだ。こんな所にぐずぐずしてはいられない」

サングラスの男が宮野に命じた。

貨物船の航跡を後に残して、漁船は大きく旋回した。帰りの船の中で、取り立てて言葉を交わす者もいず、ピクニックのようにはいかなかった。ただ一人小柄な男だけが、相変わらずニヤニヤと笑っていた。

牛島を過ぎ漁村の明かりが、ポツリポツリと見えだした頃、保安庁の巡視艇が慌ただしく漁船の前を横切って行った。先ほどの爆発地点に無数の船の明かりが見えている。

「事故の捜索をやっているようだ」

宮野が言った。

「速やかに通過するんだ」

サングラスの男が言った。

事故の現場を横切る時、巡視艇のサーチライトが漁船を照らし出した。一瞬まぶしさに小林の目が眩んだ。しかし、何事もなかったようにライトは方向を変えていった。

小柄な男の手にはピストルが握られていた。

「そんなもの早くしまおうんだ」

サングラスの男が怒鳴った。

「ちっ」

小柄な男は舌打ちをするとピストルをしまい込んだ。

（船乗りらしい男と頭のいかれた男。この二人の関係はなんだ。お互い気のあったチームメイトという間柄でもないみたいだし、サングラスの男が主導権を握っているが、ボスというわけでもないみたいだ。この二人が結びついているもの、それは木箱の中身だ。木箱の中身だけが秘密を知っているに違いない）

小林は二人のやりとりを見て思った。

入り江の薄暗い外灯の明かりが棧橋を照らし出していた。宮野は船を棧橋に接岸すると、小林にもやいをするように言った。

船をロープで固定すると、四人で力を合わせて足場の不安定な甲板で、よろめきながら木箱を棧橋に下ろした。

「車を取ってくる」

サングラスの男は、棧橋のたもとに停めてある車に向かった。

その間も、小柄な男は小林と宮野を交互に眺めてはニヤニヤ笑っていた。

（こいつは一体何を考えているんだ。いっその事このまま殴り倒して海にたたき込んでやろうか）小林は思ったが、男のポケットにしまい込んである鉄の固まりのことを思い出して、その考えを頭から追っ払った。

白いライトバンが棧橋をバックしてきた。

そして、木箱の前でピタリと止まった。

「積み込むんだ」

木箱を積み込むと、サングラスの男は車に乗り込みエンジンをかけた。

「ユックリ、フリムケ」

突然、背後で男の声がした。小林が後ろを振り向くと、銃口が二人に向けられていた。

（思った通りだ。こいつらは俺達をほっといてくれるほどお人好しじゃなかった）

「仕事はうまくいったはずだ」

宮野が言った。男は宮野の言葉に耳を貸さず、「リョウテヲ、タカクアゲロ」と二人を銃で脅した。

小林は男の言葉のアクセントにおかしなものを感じた。

「殺すつもりか」

小林の声は震えていた。

「サンバシノハシマデ、アルケ」

(間違いない。こいつは外国人だ。浅黒い東洋系の顔に真っ黒な髪。だが、今となつてはそんなことはどうでもいいことだ。とにかく、この場を切り抜けることが先決だ)

小柄な男の顔からは、あのイヤミな笑いは消えていた。

小林と宮野は男の指示に従って、棧橋の端に向かって歩いた。

逆らうには悪い状況だ。だが、諦めてはいけない。チャンスは必ずやってくる。

小林は自分に言い聞かせた。宮野は海を眺めては、小林に目配せを送っていた。

冗談じゃない。宮野は海に飛び込むつもりだ。俺にも飛び込むように合図を送っている。この寒空の中を弾をよけながら、奴らの目の届かないところに、泳いで逃げる自信なんか俺にはとてもない。

飛び込むなら一人で勝手にやってくれ。俺は自分のやり方で、この場を切り抜けてみせる。

小林は宮野に心の中で言った。

突然、後方でタイヤの悲鳴があがった。

「チキショウ！ダマサレタ」

小柄な男が叫んだ。

小林が振り向くと、ライトバンが猛スピードで栈橋から、走り去ろうとしていた。

「カギ、ヨコセ」

男が銃で脅しながら、小林に言った。

「ハヤクシロ。クルマノカギダ」

男は小林に銃口を向け凄んだ。

小林はポケットから、マスタングの鍵を取り出すと、男の頭上に投げあげた。男は手をいっぱい延ばして、鍵をつかもうとしたが、小林の計算通り、鍵はその上を通過して地面にはねた。そのとき、男の体勢が崩れた。

(チャンスだ)

しかし、男に飛びかかろうとする小林に、宮野はタックルをくらわしてきた。そして、二人とも凍り付くような海の中に崩れ落ちていった。海に落ちた瞬間、小林は海水をがぶ飲みしてしまった。とても、ビールのような味だとは言えなかった。夜光虫の不気味に光る漆黒の海中をもがきながら泳いでいると、冷たさと息苦しさが頭の芯が破裂しそうに痛み出した。

（畜生、宮野め血迷いやがって。俺は水は苦手なんだ。いつまでこんなところでもがいてないといけないんだ。水面ではあの気遣いが俺の頭をスイカのように粉々にしようと待ち構えている。俺はこのまま海で魚のエサになっちまうのか。畜生、足がつりそうだ。冷たくて頭が割れそうだ。息苦しくて肺が爆発しそうだ）口と鼻から空気のアワがポコポコと音を立てて漏れていく。

小林は息苦しさに耐えきれず、水面に顔を出した。そして、喘ぎながら息を吸い込んだ。

呼吸をするたびに、喉がゼイゼイと苦しげに音を出している。頭はズキズキしていたが、穴の開いた様子はなかった。しかし、弾の代わりに小林は、人の笑い声の洗礼を受けることになった。

「いつまで海につかっているつもりだ。もう野郎は行っちゃったぜ」

栈橋の上で、宮野が小林の必死にもがく姿を見て、笑っていた。

そして、笑い声の背後では、マスタングの爆音が、小林に『さよなら』を告げていた

。

悪魔の呼び鈴が、鉄のハンマーで頭を打ち続ける。（もう苛めないでくれ。そっとし
といてくれ。俺は確かにノミ屋だ。だけど取り立てだって穏便だし、人に恨みを買うよ
うなあくどいことは、やってないはずだ。それなのに、どうして俺を苛めるんだ。もう
許してくれ。これ以上、俺の頭を叩かないでくれ）

小林は苦痛のあまりベッドから飛び起きた。

時計を見ると午前七時前だった。（こんな朝早くから一体誰だ。俺の知り合いに人生
に前向きなやつはいない。きつとろくでもない客だ）小林は訪問客を無視することに
した。しかし、小林の決意をあざ笑うかのように呼び鈴は連打された。

玄関のドアを開けると、大柄な男が茶色のトレンチコートに、身を包んで立っていた。男は小林の顔を見ると、そのごつい顔を子供のようにほころばせた。

「寒くてかなわん。ちょっと邪魔するぞ」

男は玄関に上がり込むと畳のような体をゆすって、部屋に入ってきた。そして、ソファーに深々と座り込んだ。

「今日は一段と冷え込むな。熱いコーヒーが飲みたい気分だ」

小林はガスストーブに火を点け、男の要望に応えるため炊事場に立った。

「できればブランデーも少し入れてくれ」

男は大声で言った。

小林はお湯を沸かしコーヒーをたて、ブランデーを注ぐと男に差し出した。男はコーヒーの匂いを嗅ぐと（正確にはブランデーの匂いだが）音をたてて啜りだした。

「ああ、生き返ったようだ」

男は満足気に息をついた。

「ここんところ年のせい朝の仕事が辛い」

男は赤く充血した目をしょぼつかせた。そして、ごつい指で目頭を何度も揉みほぐした。

男は『和刈布署の石原』だった。

風紀係の刑事で、小林の仕事を暗黙の内に認め、その見返りにいくらかの謝礼を要求する一つまり世間でいう『悪徳デカ』ってやつだ。

「お前の大事にしてたポンコツが見えないようだが、とうとう売っちゃまったのか」
突然、石原が言った。

その言葉で小林の頭にあの夜の悪夢が蘇ってきた。

「いや、ダチに貸してる」

（盗まれたなんて言えば、あの夜の事を洗いざらい話さなきゃならない。相手は悪徳とはいっても、年季の入ったデカだ。根堀り葉堀りほじくり出し、金になる木を見つけようとするだろう）

「そうか。ところでお前、昨日はどうしてた」

「きのう・・・」

小林は考えた。

（車を盗まれて、宮野の家で夜を明かして、朝の電車に乗り門司港に帰ってきたのが、九時前だった。そして、そのままベッドにゴロンだ。今が朝の七時だから丸一日俺は寝てたことになる）

「昨日は寝てた」

小林は答えた。

「一日中か」

「そうだ。一日中だ」

小林は確信を持って言った。

「結構な身分だ。善良なる市民は朝早くから北風に吹かれて寒さの中を震えながら働いているというのに、ノミ屋は一日中ベッドの中だって、世の中どっか狂ってるぜ」

石原はさっきまでの穏やかな態度と違い、小林にぼやきだした。

「一体、何が気に入らないんだ」

小林は怪訝に思った。

「おい、ノミ屋、よく聞けよ。俺がこんな朝早くから寒さを我慢して働いているのは、お前のおかげなんだぞ」

石原は声を荒立てた。

「俺のおかげ・・・」

「そうだ。お前のおかげだ」

「俺が何をしたって言うんだ」

「今朝早く、お前の車が、田野浦の岸壁で塩漬けになって発見された。しかも死体付きだ」

石原は苛立ったようにコーヒーを啜った。

「殺されたのか」

小林は言った。

「なんで、お前に殺しだってわかるのか。お前、何か隠してるな」

「いや、そんな気がしたんだ・・・」

小林は言葉を濁した。

「おいノミ屋よ、殺しはいけねえ。たとえ直接手を下してないとしてもだ。殺しなんかに関わってはいけねえ。ただのノミ行為とはわけが違うんだ。俺もお前を助けることができねえ。この際、知ってることを正直に話すんだ。少しは力になれるかもしれねえ」

石原はしみじみと言った。

「本当に知らないんだ。嘘じゃない。俺は昨日一日本当に寝てたんだ」

「じゃ聞くが、車は誰に貸したんだ」

小林は返事に困った。その場凌ぎで嘘をついても、時間が経てばすぐにばれてしまうだろう。それに嘘とばれた時には、ますます自分の立場が悪くなってしまう。ここは石原に本当のことを話してしまったほうがいいかもしれない。

「実は車は盗まれたんだ」

小林は言った。

「嘘は聞きたかねえ」

「嘘じゃない。信じてくれ。これから知ってることは全部話す」

そして、あの夜起こったことを石原に話し始めた。

石原は最初、身を乗り出して話に聞き入っていたが『木箱』の話の頃から、ソファーにあぐらを組んで座り込み、ボールペンの先で足の裏を掻き始めた。

「これで話は全部だ」

小林が話を終えてもまだ石原は足の裏を掻いていた。

「どうも水虫が痒くていけねえ」

石原はぽつりと言うと、

「ノミ屋よ。人生というもんは、知らなけりゃ何もなくて済むものを、知ってしまったばかりに面倒に巻き込まれてしまうことがあるもんだ。平穩無事に生きたけりゃ、いろんな事に首を突っ込まないことだ」

自分の人生訓を説きだした。

「お前の関わった事件は、俺には荷が重すぎる。忘れちまうことだ。今言ったことは全て忘れちまうことだ」

石原は残ったコーヒーを飲み干すと、トレンチコートを手にして立ち上がった。

その拍子に、腹の肉を締め付けていた、ベストのボタンが弾け飛んだ。

「そろそろ、この背広も替え時だ。きつくてかなわん」

石原は突き出した腹を、関取のように叩いた。

「もうじき、正式に呼び出しがかかるはずだ。その時は、車は盗まれたと言い張るんだ。決して、本当の事は言わないことだ。そのほうが俺とお前、お互いのためだ」

石原は諭すように言った。

そして、子供のような笑い顔を見せ、小林に背を向けた。

小林は石原の後について玄関に向かった。

「送らなくていい」

石原は言った。

「いや、新聞を取るだけだ」

「そうか、俺の勘違いか。女房でさえも送ってくれないんだ、お前が送ってくれる訳がないか」

石原はいつもどうりの『自称・仏の石原』に戻っていた。

小林は石原を送ると、新聞を持ってベッドに戻った。

三面記事の下段に、あの夜の事故のことが載っていた。

『和田沖にて漁船炎上、乗組員不明。事故の原因は、只今調査中である』

簡単な記事だった。

小林の脳裏に、夜の海を深紅に染めた火柱が蘇ってきた。あの状況では、生存者どころか、遺体だって満足に回収できないだろうと思われた。

海上での取引・そして内ゲバ殺人。この事件の背後に潜んでいる得体の知れないもの。それは小柄な男がいなくなった今、サングラスの男だけが知っている。いや待てよ、果たして殺されていたのは、小柄な男なんだろうか。俺は車の中の死体を見ていない。マスタングを盗んだのが、小柄な男だったので、そう決めつけてるだけだ。いずれにしる、石原が言ったように、この事件は早く忘れた方が良さそうだ。

電話のベルの音で、小林は現実に戻された。

「はい。めかりクラブです」

小林の職業用コードネームだ。

「栄町の伊藤だが、2レースの1-3、特券で10枚頼む」

忘れていた。今日は土曜日だ。小倉競馬も最終日に入り、今日・明日と電話の対応で忙しくなるはずだ。

小林は頭を冷やすために、風呂に浸かった。風呂から上がると、車の盗難届を和刈布署に出し、マスタングの代わりに、知り合いの中古車屋に車を頼んだ。

その日の午後、和刈布署から呼び出しがあった。

相当の刑事は、何とか小林の尻尾を掴もうと、執拗に質問を繰り返したが、小林は石原に言われたとおりに、車は盗まれたもので、他のことは何も知らないと主張した。

夕方近くなって、小林はやっと釈放された。

しかし、疑いが晴れたわけではなかった。

そして、塩を吹いたマスタングと対面した。イグニッションキーをひねっても、老兵は二度と息を吹き返さなかった。

土曜・日曜とレースはたいした波乱もなく終わり、冬競馬の舞台は名古屋へと移った。

事件から一週間後の、金曜日の午後、車が届いた。

ブルーのホンダだ！

メーターが一回りしてる割には、外観のくずれも少なく、エンジンもよく回り、足代わりをするには十分だった。

トルク・振動・音、ドライバーの五感に訴える全ての感動は失われていたが、それもじきに慣れてしまうだろうと思われた。

和刈布公園を一回りして、門司港の繁華街に出た。大通りを直進して、途中の交差点を左折し、山の手に向かった。

門司公会堂の前で、信号が赤に変わり車を停止させた。公会堂には、花輪が多数飾られ、喪服の人たちで溢れかえっていた。

そこでは、タイで墜落した航空機事故の合同慰霊祭が行われていた。

結局、あの飛行機事故は多数の死者を出したまま、原因はわからずじまいだった。

ふと窓の外に目をやると、記帳をするために並んでいる一人に、小林の目が釘付けになった。

「ブォ〜ン」背後でトラックのクラクションがけたましく鳴り響いた。その音で目を奪われていた人物がこちらを振り向いた。

（間違いなし。あの時の女だ）

小林はトラックが通れるように、車を左に寄せた。その横をトラックは歯ぎしりするように、ぎりぎりにすり抜けていった。

女は小林に気付かなかったようで、自分の記帳の順番をおとなしく待っていた。

二月の薄日の中に見る女の素肌は、透き通るように白く、弱々しかった。蜘蛛の糸のように、細く切れてしまいそうな髪を三つ編みにして、後ろで束ねている姿は女と言うよりも女の子だった。

（あの髪を振り払うとき女に変わってしまうのだろうか）小林はふと考えた。

女が記帳を済ませて、公会堂に入ってしまうまで、小林はずっと見つめていた。

（麗しの瞳か）女を見送ると、ギアをローに入れ車を出そうとした。

「ド～ン！」

突然、大音響と共に車が横揺れを起こした。

小林は辺りを見回したが、周りには事故の起こった形跡は見えない。公会堂のほうを振り向くと悲鳴と共に人々が雪崩をうって出口に殺到していた。そして、少し遅れてその人たちを包みこむように煙が漂ってきた。

小林は、車を急いで飛び出ると公会堂に走った。（一体全体、何が、起こったんだ）

公会堂の前は、興奮した人たちが大声で叫びあっていた。小林は玄関に続く階段を駆け上がろうとしたが、次々に降りてくる人波に押されて思うように進むことができずにいた。

老人や女たちの何人かは階段を踏み外して小林の足もとに転げ落ちてきた。小林は強引に人混みをかき分けて、前に進み、やっとの思いで入り口に辿り着いた。公会堂の中に足を踏み入れると、火薬の匂いが鼻をついてきた。

（爆弾だ！）小林は足を早めた。

煙が建物全体に充満して、目を開けているのが辛かった。煙をはらいながら注意深く前に進むと、逃げ場を失った人たちが体中血だらけにして、そこら中でうごめいていた。爆弾が仕掛けられた場所は、来賓席の横の通路のようだった。その周りの椅子は、跡形もなく弾き飛ばされ、手足や頭が吹き飛んだり、体に椅子のパイプが突き刺さった死体が、見るも無惨に転がっていた。

（まるで戦場だ）

小林は戦争映画のワンシーンを見ているような錯覚にとらわれた。しかし、目の前で起こった惨劇は、紛れもない現実だった。

吐き気をこらえながら、注意深く足を進めようとする小林のズボンの裾に、何かが絡んできた。足元に目を凝らすと、血だらけの顔の男が虚ろな目で、ズボンの裾を掴んでいた。小林はその形相に一瞬たじろいだが、男を助け起こそうと手を差し出した。しかし、希望も虚しく、男はガックリと頭をたれて、息絶えていった。

小林は気持ちを取り直すと、足を進めた。

煙がしみて涙が滲んだ目で、肉の塊をじっと見つめていると、胸がむかついてきた。吐き気をこらえて、肉の塊にじっと見入ったが、女の死体は、その中には見当たらなかった。小林は倒れている人に何度もつまづきながらも、公会堂の中を女を捜して歩いた。

そして、中央の列の椅子の間で、うつ伏せになり倒れている女を発見した。

外傷は見当たらないが、意識もなかった。

耳を女の口許に寄せると微かに息をしているのが感じられた。

（息がある）

小林は女を抱えると出口に向かった。

公会堂の前は救急車を待つ人たちで、大混乱していた。

（救急車が来るまで待ってなんかいられない。知り合いの外科医のところに行こう）

小林は女を抱きかかえたまま、強引に道路を渡りきると、車に向かった。そして、女を助手席におろし車に乗り込んだ。

『山下整形外科』その前で車を止め女を抱いて病院に飛び込んだ。

『休診中』の札を無視して、診察室の扉を足で押し開けた。

診察室の中では若い看護婦が二人、世間話に夢中になっていた。

「急患だ。先生を頼む」

女をベッドに降ろした小林の手を四個の目玉が、ポーゼンと見つめた。

「急患だ」

その声にびっくりして、看護婦の一人が弾かれたように、医者を呼びに走っていった

。

「どうされたんですか」

もう一人の看護婦が、尋ねた。

「わからん、意識がない」

小林が小さく首をひねると、

「何事だ」

突然、背後で大声がした。

小林が振り向くと、肩幅の張ったずんぐりした体を、白衣で包んだ男が立っていた。

「おまえか、一体何事だ」

男はベッドに寝ている女の脈を取りだした。

「頭を打っているようなんだ」

小林は言った。

「気が散るから、お前は外で待っててくれ」

小林は医者を見た。体の割に顔が大きく、えらの張った顎に意志の強さが表れていた

。

(信頼できる顔だ)

小林は言われた通りに、待合室で待つことにした。

(暴走族か、酔っ払いの喧嘩がうるさいぐらいの、この落ちぶれた港町で、一体何が起きたんだ。航空機事故と慰霊祭の爆弾テロ、二つは何かで繋がっているのだろうか？)

小林は頭を抱えた。

(漁船の爆発・密輸・殺人・そして爆弾テロ、短期間の中にいろんなことが俺のまわりで起こりすぎだ)

看護婦の呼ぶ声で、小林は我にかえった。

診察室に入ると、医者が腕組みをして小林を待っていた。

「交通事故か」

医者は尋ねた。

「交通事故ならば、警察に届けなきゃならん」

「いや違う。門司公会堂で爆発騒ぎがあったんだ」

「爆発？」

「そうだ。たまたまそこを通りかかったんだ。それで知り合いのあんたのところに連れてきた」

「う～ん。いずれにしろ警察には届けなきゃならん」

医者は机に向き直るとペンを取った。

「患者の名前は？」

「知らない」

「知らない？お前の知り合いじゃないのか」

医者はペンを置くと小林に向き直った。

（そうなんだ。俺は女の何を何も知らない）

「知り合いでもない人を、勝手に連れ出してきたのか。それじゃまるで誘拐だぞ」

「いや、顔は知ってるんだ。だけど名前までは知らない」

「もういい。警察には俺の方でうまく話しとこう」

「容体はどうなんです」

「検査の結果が出るまで、詳しいことはわからん。ただ、頭を打ってることだけは確かだ。頭の上の方にこぶができてる」

「それで、助かるのか」

「心配ない。命に別状はない。だが、二・三日は絶対安静だ」

「今、会えるか」

「今も言ったように、二・三日は駄目だ」

小林は医者に礼を言うと病院を出た。

事務所に戻りテレビをつけると、どのチャンネルも爆弾事件の中継をやっていた。

二日後、小林は病院を訪ねた。

面会はまだできなかった。受付の看護婦に買ってきた花を渡すとおとなしく病院を出た。

そして、二日後また病院を訪ねた。

今度は面会の許可が下りた。小林は受付の看護婦にウィンクすると二階に駆け上がった。

病室の前には、『小野田洋子』と書かれた名札が掛けてあった。

(小野田洋子か、いい名前だ)

病室のドアをロックしたが、中からは何の応答もなかった。小林は意を決するとドアを開け中に入った。

子供のような安らかな寝顔をしてて、女はベッドで眠っていた。頭に巻かれた包帯がなければ、とても病人とは思えなかった。小林は女を起こさないように、枕元の花瓶を取り上げた。そして、花を取り替えるために、洗面所に行った。

（俺はなぜ、見ず知らずの女にこんなに優しくするんだろう。雨の日に言葉を交わしただけなのに、なぜこんなに気になるんだろう）

花を取り替え病室に戻ると、女は目を覚まさしていた。

小林の顔を見ると、大きな瞳をさらに大きくした。

「起こしたようだな」

女は何も言わずに小林を見つめ続けた。

小林は女の視線から逃れるように、枕元に花瓶を置いた。

「花を換えてきた」

しかし、女は何も答えずに小林の動きを、ただ大きな瞳で追っていた。

（どうして何も言わないんだ。『ありがとう』とか『すみません』とか『あなたは誰ですか』とか、言ってくれてもいいじゃないか）

小林は女の視線に、心の中を読まれているようで、いたたまれなくなってきた。

「元気になってよかった。俺は帰ろう」

小林は女に軽く手を振ると、ドアノブに手をかけた。

「お花、ありがとう」

病室を出ようとした小林の背後から、消え入りそうな声が聞こえてきた。

小林の足の動きが止まり、体に力が蘇ってきた。

「お花、ありがとう」

今度はもっとはっきりとした声で、聞こえてきた。

（そうなんだ。俺はこの言葉を待っていたんだ）

「体のほうは、大丈夫なのか」

小林は喜びを隠して言った。

「体はまだ痛いけど、頭の方はもうはっきりしてます」

女は答えた。

「それも、じきに治る。頭が何ともなくて良かった」

「看護婦さんに聞いたんですけど、あなただったんですね。私をここに連れてきてくれたのは・・・」

「あの時偶然あんたを見たんだ。そしたらあの騒ぎだ。それで慌てて中に飛び込むと、あんたが倒れていた。救急車を待っても、らちがあかないと思って、知り合いのこの病院に連れてきたんだ」

「どうも、ありがとうございました」

「ただのおせっかいだ」

「おせっかいが、好きなんですね」

女は笑っていた。小林も思わず笑っていた。

「あの時も、おせっかいだと言って、雨の中、一緒に居てくれましたね」

「あれは冷たくて辛かった」

「変な女だと思ったでしょう」

「ああ、強情な女だと思った」

「子犬、埋めてくれたんですか」

「丁寧に埋葬した」

「良かった。ずっと気になってたんです。迷惑かけてどうもすみません」

女は胸のつかえが取れたように、顔をくずした。小林はその笑顔を見て、胸の中に少し痛みを感じた。

「それにしても、ケガが軽くて良かった。家の人も安心しただろう」

「ええ」

突然、女の顔から笑顔が消え、暗い表情が覗いた。

「なにか悪いことでも言ったかい」

「違うんです。頭が少し痛くなってきたんです」

女は小林から目をそらして、窓の外を眺めだした。

「まだ、体も治ってないのに喋りすぎたんだ、少し寝た方がいい。俺はもう引き上げよう」

その言葉で、女は小林を見た。そして尋ねた。

「あの、お名前教えてください」

「名前？小林だ」

「こばやしさんですか？」

「そうだ。こばやしだ」

「小林さん。どうもありがとう」

小林は女に軽く手を振ると、病室を出た。

（これできっかけはつかめた。後は退院の日までお見舞い攻撃だ。そして、退院祝いに海に見えるレストランで食事だ）

小林は弾む足取りで、病院の階段を駆け下りた。そして、受付の看護婦にまたウインクをした。すると、看護婦からウインクが返ってきた。

(人生悪いことばかりじゃない。俺にもやっとチャンスがまわってきた)

小林は舞い上がる気分を抑えきれずに、車の中でラジオに合わせて、大きな声で歌っていた。ただひとつ、女の見せた暗い表情は気になってはいたが・・・。

次の日、小林は花と果物を買って病院に行った。受付の看護婦が小林を見ると、ウィンクをよこした。

女はベッドから起き上がるほど、回復していた。小林は一時間くらい冗談を言ったりして女と話した。女の方も小林の冗談に笑ったりして、だいぶ打ち解けてきた。

帰り際に、自分の名前を教えてくれた。小林は女の名前を知っていたが、知らないふりをした。帰りの車の中で、小林は何度も女の名前を繰り返した。そして、ノミ屋商売から足を洗い、堅気になろうと心に誓った。

次の日、小林はまた病院に行った。

受付の看護婦は小林を見てもウインクをよこさなかった。小林は怪訝に思い、階段を駆け上がった。病室の名札は外されていた。

小林が病室に入ると、カラのベッドが彼を迎えた。茫然と立ち尽くしている小林の背中を誰かが叩いた。受付の看護婦だった。

「これ預かってます」

看護婦は手紙を差し出した。

『小林さんへ。

いろいろお世話になって感謝しています。

急に父が迎えに来たので退院します。

体のほうもすっかり良くなって、もう大丈夫です。心配しないでください。

あなたに直接お礼を言わなければいけないんですが、それができなくなりました。とても残念です。こんな形でお別れすることをお許し下さい。

いろいろどうも、ありがとうございました。洋子』

小林は手紙を読み終わると、ビリビリに破き、ゴミ箱に捨てた。そして、体全身の力が抜け落ちていくのを感じていた。ベッドに手を置いてみても、洋子の温もりはすでにそこにはなかった。

小林は肩をがっくりと落とすと、重い足取りのまま病室を後にした。

（所詮、俺には縁のなかった女だ。ノミ屋はノミ屋らしく人生の裏街道を、慎ましく生きればいいんだ。それを一人で舞い上がっちゃって……。全くお笑いだぜ）

小林の去った病室には、貰いてのなくなった赤いカーネーションが、色鮮やかにカラのベッドに咲いていた。

(誰かが俺を呼んでいる。悲鳴に近いその呼び声が、頭の中を縦横無尽に徘徊する)

小林は無意識にベッドの上の受話器を取り上げた。

電話は、宮野の奥さんからだった。

宮野が下関に買い物に出たまま、二日前から帰ってこないらしい。何の連絡もなく心配なので、心当たりを知らないかという電話だった。小林はできる限りの手を尽くそうと約束して、電話を切った。

(なんてこった。宮野が消えちゃった)

小林は、二日酔いで、朦朧としている頭を抱え込んだ。

時計を見た。午前八時過ぎだった。

洋子が居なくなった寂しさを紛らわすために、小林は明け方まで酒を飲んでいて。その酒が体内で消化されずに、小林の思考能力を妨げている。

(もう少し眠ろう。行動はそれからでも、決して遅くはない。神も許してくれるだろう)

小林はまたベッドに潜り込んだ。しかし、ある考えが脳みそを刺激し、眠りの世界から現実へと、小林の意識を引きずり出した。

(待てよ。あの夜の事件に関わった男が殺され、宮野は行方がわからなくなった。そして、次に狙われるのは？ そうだ、この俺だ)

小林は眠気も消し飛び、体全体に鳥肌がたつのを憶えた。

(犯人は次に俺を狙ってくる。間違いなく次の標的は俺だ。やつは何者なんだ？どこに潜んでるんだ？何か手がかりがあるはずだ)

小林は、あの夜のことももう一度思い返してみた。

(なにかある。俺の忘れていた大事なことが・・・)

小林の目は天井の一点に注がれていた。

(そうだ。貨物船だ)

小林は貨物船を脳裏に浮かべ、黒い船体の白い文字を思い出すことに、意識を集中した。そして、叫んだ。

「九陵だ！」

小林はベッドを飛び出した。

Hondaを運転しながら、小林は宮野のことを考えた。

（宮野は本当にさらわれたんだろうか？それはなんのためなんだろう？）

車は海峡沿いに国道199号線を、小倉方面に向かっていった。

小倉にあるA新聞社の西日本支社に勤めている『泉』という男に会うためだった。

泉とは、高校時代の同級生だった。高校卒業後、偶然、小倉競馬場で出会い、レース中に互いのツキを競い合った仲だった。しかし、泉も小林もレース終了後の敗北感に、互いの人生のツキの無さを確認することが多かった。

「もう絶対に競馬なんかやんねえぞ」

ツキに見放された時の、互いの決まり文句だった。だが、お互いにそれが嘘だということもわかっていた。一週間後には、新たな挑戦者の気持ちで、予想紙と取り組んでいた。しかし、泉は小林とは違い、バクチに対して、自分のルールを持っていた。それは、自分に許された賭け金の中で競馬を楽しむということだった。小林は、競馬で泥沼にはまり込んだが、泉は生活まで賭けるような無謀なことはしなかった。

泉の勤めているA新聞社は、小倉駅の東の新しく区画整理された一画に建てられていた。

八階建ての白いビルで、構築されてまだ間がなかった。

小林は新聞社の駐車場に車を止め、玄関に向かった。

自動ドアが開くと、女がにっこり微笑みかけた。それは天使の笑顔だった。

「社会部の泉さんに面会したいんですが・・・」

小林は天使に言った。

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

天使は微笑んだまま尋ねた。

「小林ってもんだ。高校の時の同級生だ」

「小林様ですね。少々お待ちください」

天使は内線電話で連絡を取りだした。

「すぐにまいりますので、あちらの席にお掛けになってお待ちください」

小林が言われたとおりに椅子に座って待っていると、坊主頭に背の高い男がやってきた。

「珍しいな。何の用だ」

泉は小林を見ると懐かしそうな顔をした。

そして、小林の向かいに側に腰を掛けた。

「出家でもしたのか？」

小林は泉に言った。

「ん・・・そうか、この頭か」

泉は照れくさそうに頭を手で撫でた。

「実は、ルールを破っちまった。そのための罪滅ぼしだ」

「何のルールだ」

「競馬だ。サラ金に手を出してしまってな」

小林は自分の過去がオーバーラップしてきた。

「それで頭を丸めたのか。俺には理解できん」

「俺の純粋な気持ちは、ノミ屋のお前にはわからん」

泉は上着のポケットからタバコを出すと、ジッポで火をつけた。そして、うまそうに吸い出した。

「ところで今日は何の用だ」

「お前に調べてもらいたいことがあるんだ」

小林はポケットから紙を取り出すと、泉に渡した。

「きゅうりょう」

泉は声に出して、メモを読んだ。

「貨物船の名前だ」

小林は言った。

「この船の何が知りたいんだ」

「わかること全てだ」

「全て？」

泉は怪訝そうな顔で小林を見た。

「何故この船のことが知りたいんだ」

「お前には関係ない」

小林は言った。

「そうはいかない。俺の職業は新聞記者だ。『知ること』が俺の仕事なんだ」

泉の顔には一步も引かないぞという決意が表れていた。

小林はその顔を見てしばらく悩んだが、泉の『知る権利』を尊重しようと思った。

「記事にしないと約束するか？」

「小林。しつこいようだが、俺の職業は新聞記者なんだ。それは約束できん」

小林は泉の口調に記者魂を感じた。

（泉が記事にしようと、俺が狙われているという事実は変わらないんだ。そんなことに、こだわっても仕方ないことだ）

小林は考え直した。

「記事にしたいならお前の好きにしてくれ。俺にはどうでもいいことだ」

そして、泉にあの夜のことから、宮野の失踪までを話した。

「それでお前は貨物船のことが知りたいのか」

泉は小林の話聞き終えと言った。

「そうだ。俺には何が俺の周りで起きているのかさっぱりわからないんだ。今のところ、貨物船だけが手がかりなんだ」

小林は息をついた。

「わかった。これからすぐに調べてみよう」

泉はタバコをもみ消すと、椅子から立ち上がった。

「そうだ、お前の連絡先を教えてくれ」

小林は電話番号の書いたメモを泉に渡した。

泉はそれを受け取ると、仕事に戻っていった。

小林は泉がエレベーターに乗ってしまうまでじっと姿を追っていた。そして、泉が見えなくなると、椅子から立ち上がり玄関に向かった。しかし、受付には、天使がいなかった。

小林は、天使もやっぱり小便をするんだろうかと馬鹿なことを考えながら、新聞社を後にした。

帰りの車の中で、前夜の睡眠不足と小春日和のせいで小林は何度も居眠りをしかけた。

車の窓を開け、冷たい風に当たっていると、ボンヤリしていた頭が幾分スッキリとしてきたが、睡魔を完全に追っ払ってしまうというわけにはいかなかった。

車を駐車場に置き事務所に戻ると田島が来ていた。

田島は小林に何かを言おうと口ごもっていたが、小林は田島の言葉を子守歌にしてベッドに倒れ込んだ。

次の日、目が覚めると、また田島がいた。

田島は昨日からここにいたんだろうかと小林は思った。

「田島。何の用事だ」

「最近、仕事の呼び出しがないから不安になって来てみたんです。ローンもまだいっぱい残ってるし……。何か仕事ありませんかね」

小林はこのところ自分のことが忙しくて、田島のことをすっかり忘れていた。

「そういえば、昨日から何も食ってない。何か食べ物を買ってきてくれ」

「何がいいですか？」

「お前に任せる」

「弁当でも買ってきましょうね」

小林は田島が買い物に行っている間に、田島の集金先の予定を紙にメモした。

「ただいま帰りました」

田島がビニール袋をさげて帰ってきた。

「これが弁当です」

小林は弁当を受け取るとメモを田島に渡した。田島はアイスクリームを食べながらメモの集金先を眺めていた。田島は酒も飲まないし、タバコも吸わないが、アイスクリームだけには目のない男だった。いわばアイスクリーム中毒者だった。

小林が弁当の包装紙を開けていると電話が鳴り出した。

「『泉さん』からです」

小林は田島から受話器を受け取った。

船のことがわかったから、どこかで会いたいという電話だった。

『三時に和刈布のノーフォーク広場』で会う約束をして小林は電話を切った。

「田島。俺は先に出るから後は頼んだぞ」

小林は胸の高鳴りを感じていた。

「まだ、弁当食べてませんよ」

田島は弁当を見つめたまま、小林に言った。

「お前代わりに食ってくれ」

小林が言うと、田島は『いただきます』と言って弁当を食べ出した。

小林はホンダに乗ると『太刀浦』のコンテナターミナルに向かった。

待ち合わせの時間まで、まだ一時間ある。

それまでの頭の整理だ。

和刈布の海岸線を抜け、門司港インターの前を通り、ターミナルに向かっているトレーラーの尻にくっついて、坂を下っていった。

坂を下りきった所で、道は片側三車線のゆったりとした道路になっている。

小林は船だまりの中で、揺れている船を横目で見ながら車を走らせた。

『5-6号岸壁』の標識を曲がると、大型の貨物船が岸壁に横付けされていた。

小林の語学力では判別できない文字で、船体に名前が書いてあった。

あの夜の船と同じくらいの貨物船だ。この船の名前は俺にはわからないが、あの夜確かに俺は、船の名前をはっきりと確認できた。

貨物船は夜の海上に、木箱のプレゼントを落としていった。

その木箱をめぐって、男が殺され、宮野は行方がわからなくなった。あの夜、取引に関わった人間が、一人一人いなくなっている。宮野をさらったやつは、いずれ俺のことを突き止め、消しにかかるだろう。俺は相手のことをまるで知らないまま、この世から抹殺され、ノミ屋の商売上のトラブルとして事件は片付けられる。真相は闇に葬られ、時の流れが爪あとの痕跡も消してしまう。

（何をぐずぐずしてるんだ！やつが気付く前に、どこか遠くに潜んでしまえ！もう一人の自分が俺をせき立てる。だめだ！俺はどこにも逃げない！俺は真相が知りたいんだ！）

小林は車をUターンさせると、今、来た道に戻り、泉との待ち合わせ場所に向かった。

ノーフォーク広場の海に面した駐車場にホンダを乗り入れ、時計を見ると約束の三時にはまだ二分あった。駐車場のすぐ脇には、海上保安庁の詰め所があり、車のフロントガラス越しに、係留されている保安庁の巡視船が波間にゆらゆらと揺れていた。

ドアを開け車の外に出ると、木枯らしに舞い上がった落ち葉が足元に纏わり付いてきた。煉瓦で舗装された広場の道を小林は約束の場所まで歩いた。

関門海峡に面したベンチで、男が一人タバコを吸っていた。

泉だった。

小林は泉の横に腰を掛けた。しかし、泉はそんな小林に気付いていないかのように、海を見つめたままだった。

「相変わらず、流れの早いところだな」

泉が呟いた。

「あの船なんか、まるで停まっているようだ」

海峡の流れに逆らって、漁船が一隻進んでいた。

「船のことはわかったのか」

小林は泉の感傷を遮った。

「台湾籍の船だ」

「台湾籍？」

「そうだ。台湾の『ライトカンパニー』という会社の所有になっている。定期的にタイやマレーシアから日本に原木を運び、雑貨を積んで帰っている」

泉はベンチから立ち上がると、防波堤の手すりにもたれた。

「お前から話を聞いて、俺なりに考えてみたんだが、『木箱』の中身は『ヘロイン』じゃないかと思うんだ」

「ヘロインだって！確信でもあるのか」

「確信はない。だが、タイ・ミャンマー・ラオスの国境地帯は『ゴールデントライアングル』と呼ばれているケシの生産地だ。そこからやってくる船にヘロインが積み込まれてあったとしても、なんら不思議じゃない」

「木箱の中身がヘロインだとしたら、大変な量だ。少なく見積もっても100キロはあった」

小林の手の平には汗が滲んできた。

「末端価格にして、百億だ。人が殺されてもおかしくない」

「殺人が正当化できる金額か。だが、何故見ず知らずの宮野に頼んだりしたんだ。自分たちでやれば済むことじゃないか」

「俺もそれは考えた。何故奴らは、お前達に頼んだのか？ 奴らには取引のルールがあるはずだ。それに麻薬の売買は、相当慎重に行っているはずだ。何かトラブルがあったとすれば、当然中止してもおかしくない。だが、あの夜に限ってそのルールを破っている」

「取引の後で、奴らは俺達を消せばいいと考えた」

小林は口を挟んだ・

「お前達を消せばいいか。一回限りの取引なら、十分考えられることだ。しかし、奴らは今まで何度か、取引を行ったはずだ。それに今後もばれるまで行うはずだ。奴らのほうから外に知らせるような馬鹿な真似はしないでだろう。そう考えればルールを破ったのは、奴らじゃないってことだ」

「どういうことなんだ」

小林には、泉の言いたいことがわからなかった。

「つまり『木箱』は、横取りされたんだ」

「横取りされたって！一体、誰に横取りされたんだ」

「お前達を雇った二人組と、お前達にだ」

「俺達が横取りしたって！」

小林はベンチから立ち上がると、泉に詰め寄った。だが、泉はそんな小林を無視して海を見つめたままだった。

「おれはあの日は初めて二人組に会ったんだ」

小林は泉に怒鳴った。

「だが、組織の奴らはそんなふうには考えない。お前達も仲間だと考えている」

「俺にはお前の言ってることがさっぱりわからん」

小林は吐き捨てた。

「あの夜、船が爆発したって話したな」

泉は静かに話し始めた。

「ああ、沖に出るときだった」

「その爆発が、故意に仕掛けられたものとしたら、そして爆弾を仕掛けたのが、お前達を雇った二人組だと考えたら・・・」

「・・・」

「俺の考えに間違いがなければ、その時に爆発したのが本物の取引の船だろう」

泉はタバコを海に投げ捨てると、小林の方を振り向いた。

「つまりこういうことだ。あの夜、沖合でヘロインの取引があることを知った二人組が、宮野の船を雇い組織の奴らに代わってヘロインを受け取った。二人組は、お前達を殺すはずだったが、仲間割れをおこしてしまい、できなくなった。そして二人組の内一人は組織か或いはもう一人に殺され、お前の相棒は拉致された」

小林は泉の推理に寒気を憶えた。

「お前の相棒が組織の奴らに拉致されたとすれば、お前のこともいずれかぎ出すだろう。」

「俺は蛇に睨まれた蛙ってわけか」

小林は呟いた。

「ああ、奴らはヘロインを取り戻すまでは犬のように嗅ぎ回るだろう」

泉はまたタバコに火をつけた。

「爆弾騒ぎは起きるし、物騒な世の中になったもんだ。おかげでこっちは休み無しで仕事だぜ」

泉はぼやいた。

「爆弾騒ぎって、門司公会堂の事件か？」

小林は泉に尋ねた。

「そうだ。うちで今、特集を組んでいるんだが、犯行の目的さえ見当がつかん」

小林は洋子のことが頭に浮かんできた。

「お前にまた頼みがあるんだが・・・」

「また頼みか？それで今度は何を調べて欲しいんだ」

「爆弾事件の被害者の中に『小野田洋子』という女性がいたんだが、彼女について調べてくれないか」

「今度は女か？その女とどういう関係だ」

泉は尋ねた。

「ただの知り合いだ」

「ただの知り合い。それを俺に信じろというのか」

「そうだ、ただの知り合いだ」

小林は強く言い放った。

「わかった、わかった、そんなに怒るなって」

泉は小林の肩を押さえると、

「人はただの知り合いのことが妙に気になるもんだ」

そして、自分を納得させるように言った。

「何かわかったら電話をくれ」

「小野田洋子だな。帰ったら早速調べてみよう」

泉は手帳にメモを取りながら言った。

「すまん。いつかこの礼はするからな」

「それまでお前が生きてればの話だ」

泉はニヤリと笑うと、小林に軽く手を振り駐車場に向かった。

小林は泉の後ろ姿を見送りながら考えた。

（俺は何故、洋子のことを泉に頼んだりしたのだろうか？この世から抹殺される前に、もう一度彼女に会ってみたいと思ったことは確かだ。だが、今更彼女に会ったからって一体何になるっていうんだ。犯人はじわじわと真綿で首を絞めるように確実に俺を狙ってきている。そんな時に彼女に会えば、彼女までも危険に巻き込むだけじゃないか）

小林はベンチに腰をおろすと、大きくため息をついた。そして、自分の運命が今日明日かもしれないと思うと、無性に酒が恋しくなってきた。酒を飲むことで、恐怖を頭の隅から追い出すことができれば、酒に心の底から敬意をはらっても惜しくないと思った

。

小林はその夜、浴びるように酒を飲んだ。

酒場の主人から、閉店の時間を告げられ、椅子から立ち上がると、アルコールに足を支配されていた。ふらつく体でネオンの消えた裏通りを歩いていると『お好きなように襲ってください』と、犯人に訴えているようだった

（今ここで誰かに襲われれば、何の抵抗もなく息の根を止められるだろう）

小林は自分の想像に身震いし、足を早めた。

そして、ふらふらしながらもやっとの思いで、自分の部屋のあるビルのそばまでやってきた。その時、車のヘッドライトがゆっくりと背後から近づいてきた。小林はいやな予感を憶え、足早に入り口に急いだ。そんな小林をあざ笑うかのように、車はビルの前で止まり、ドアが開いた。

小林は反射的にビルの入り口に飛び込むと、階段を駆け上がりだした。しかし、酒に自由を奪われた足は、小林の思い通りに動いてくれず、階段の縁につま先をとられては、転びそうになるだけだった。階段と格闘を繰り返していた小林の耳にコツコツと靴音が響いてきた。

「くそったれの足め、動きやがれ」

小林は自分の足に悪態をついた。

そして、三階の部屋まであと一步というところで、階段を踏み外し、頭を階段の縁に打ち付けた。頭を押さえて唸っている小林の背後で、靴音がピタリと止んだ。

(やられる)

小林はとっさに両手で頭を抱え込んだ。

しかし、銃弾の代わりに大きな手が小林の肩を掴んできた。

「大丈夫か」

聞き覚えのある太い声に、小林の全身の力が抜け落ちていった。そして、緊張感から解放されると同時に、頭がずきずきと痛み出した。

小林は頭を押さえて、声の方を振り返った。

踊り場の照明を背後から受けて、コート姿の男がシルエットになって小林の目に入った。飽食と運動不足で、横に広がったその体は逃げ道を塞ぐような錯覚を小林に憶えさせた。

「階段もまともに上がれないほど酒を飲むなんざ、お前もいい身分だ」

男は和刈布署の石原だった。

「憎まれ口はやめてくれ。あんたの思ってるほど俺は今愉快じゃないんだ」

「ほう、じゃ俺はお前のような飲んだくれを世間の悪党から守るために、こんな夜の夜中まで愉快地仕事をしてるっていうわけか」

石原は小林に悪態をついた。

「言い合いはやめよう。とてもそんな気分じゃない」

小林はよろよろと立ち上がると、自分の部屋に向かって歩き出した。石原はそんな小林に手を貸すこともせずに、ただ黙って見ていた。

「そんな所に突っ立てないで、部屋に入ってくれ」

小林はドアを開けながら石原に言った。

石原はニヤリと笑うと、うなずいた。

寒々とした部屋に体を震わせながら、キャビネットからグラスを二つ取り出すとブランデーを注ぎ込んだ。石原はガスストーブに火を点けると、ストーブの前にかがみ込み手をかざして当たり出した。

「飲んでくれ」

小林はグラスを差し出した。石原はグラスを受け取ると、子供のように顔をほころばせた。

「冷えきった体にはこれが一番だ」

石原はグラスに口をつけ、ブランデーが胃の縁に火をつけるのを感じていた

「頭の方はもう痛まないか」

石原は言った。

「何か用があって来たんだろう。早く用件を済ませてくれ。俺はもう休みたいんだ」
小林は苛立ち気味に言った。石原はブレンダーをごくりと一口飲み込むと、ふっと息をつきぽつりと言った。

「お前の相棒が殺された」

「えっ・・・」

小林の手から、グラスがぽとりと床に落ちた。そして、琥珀色の液体が絨毯に黒い染みを広げていった。

「今朝方、引き込み線の脇の倉庫街の道に転がっていた。拷問でもされたんだろう。体中火傷の痕や、殴られた痕でいっぱいだ」

小林は石原の言葉を茫然と聞き入っていた。

「まるでやつは、ぼろきれ同然だった」

「誰にやられたんだ」

「わからん。ただ、お前の相棒が関わった事件と関係がありそうなので、お前に忠告に来たまでだ」

「俺も危ないとあんたは思うのか」

「たぶんな。だが相棒がお前のことを喋ってればの話だ。しかし、用心するにこしたことはねえ、しばらくこの街から姿を消すことだ」

「あんたは守ってくれないのか」

「俺にお前のボディーガードをしろって言うのか。おいノミ屋。俺はお前からいくら貰ってると思ってるんだ。月に五万だぞ。それぽっちのはした金で『懲戒免職』という危ない橋を渡ってるんだ。その俺にお前を守るために、今度は命まで賭けろって言うのか。ふざけたことぬかすんじゃねえ」

「だが俺が死ねば、あんたはその五万だって棒に振るんだ。それに俺はボーナスだっ
て出してるはずだ」

「お前は何もわかつちやいねえんだ。この事件に潜んでいるくせえもんが。だが、俺は匂うんだ。これは刑事の勘だが・・・、それは俺やお前が束になってかかってもどうしようもねえ相手なんだ。奴らにとって、俺やお前はアリンコみたいなもんだ。奴らが指を捻るだけで俺達は潰れちまうのさ」

石原は空のグラスをテーブルに置くと立ち上がった。

「悪いことは言わねえ。仕事は若いもんに任して、この街からしばらく姿を消すんだ」

石原は子供に言い含めるように喋った。そしてコートの襟を立てると玄関に向かって歩き出した。しかし、何かを思い出したように立ち止まると、振り向きざまにぽつりと言った。

「お前の殺しの捜査だけは願ひ下げにしてくれ」

小林は石原の言葉に心なしか力が無いような感じを受けた。

電話のベルが鳴っている。

小林は受話器を取り上げるとぼんやりとした頭で答えた。

「もしもし」

宮野が殺されたと聞いてから、小林は二日間部屋に閉じこもりっきりになっていた。

「俺だ。泉だ」

受話器の向こう側で泉が怒鳴っている。

「ああ、泉か」

小林は力なく答えた。

「何を寝ぼけてやがる。お天道様はとっくに東の空に上がってるぞ」

泉の声は弾んでいた。

「大穴でも当たったのか」

「馬鹿野郎。この話を聞けばお前もそんなのんきなことを言ってもらえないぞ」

「そうか、それは良かった」

「おい、どうしたんだ。キンタマでも抜かれたのか」

泉の心配気な声が聞こえてきた。

「宮野が殺された」

「そのことなら俺も知ってる。だが、お前だっていつ殺られるかもしれないんだ。今はそんな感傷に浸ってる時じゃないぞ」

泉の言葉に、

「ああ」

と、小林はうなずいた。そして言った。

「ところで何の用だ」

「小野田洋子のことだ」

泉が電話の向こうで叫んだ。

「彼女のことが何かわかったのか」

小林の胸は高鳴っていた。

「事件の全てが彼女で解けそうなんだ」

「え！」

小林は息が一瞬詰まった。

「パコダで待ってる。すぐに来てくれ」

電話は一方向的に切れた。

小林は駐車場に急いだ。そして、ホンダに乗り込むとパコダを目指した。パコダには小林のビルから車で五分とかからない。

（洋子が事件に関わっていたなんて、そんな馬鹿な事があるわけがないんだ。彼女は事件の被害者なんだ。泉はきっと何か勘違いをしてるんだ）

小林のそんな思いも泉の自信ありげな口調に不安感を募らすだけだった。

車は高速道路と交差するようにパコダに向かって和刈布の山道を登っていった。

パコダとは戦後、ビルマと日本の友好と平和のために和刈布の山頂に建てられた仏塔のことである。

そこには第二次世界大戦で戦死した英霊たちが祭られている。

小林は、山の頂上にある『和刈布山荘』の脇を通って、ふんづまりの空き地に車を乗り入れた。そして、拝観料を払うと鉄の門をくぐり抜け、三十段ほどの石段を仏塔目指して駆け上がった。仏塔の前は展望台にもなっていて、門司港の街並みはおろか、関門海峡を隔てて対岸の下関まで見渡すことができた。

しかし小林には、景色を楽しんでる心の余裕はなく、靴を脱ぎ捨てると、仏塔の中に踏み込んだ。すると、コンクリートの床の冷たさが足に伝わり、線香の匂いが鼻をついてきた。

「だいぶ元気になったようだな」

泉があたふたした小林を見て言った。泉の背後には金粉を塗られたお釈迦様が笑っていた。仏塔の中は十メートルほどの円形ドーム造りになっていた。

「洋子が事件に関わっていたって・・・」

小林は泉に詰め寄った。

「少し落ち着け」

泉は小林を制すると無数の位牌を手で指した。

「これが事件の鍵だ」

小林が位牌に目を通すと、その一つ一つに南方戦線で戦死した各部隊の名前が刻まれていた。

「この位牌と洋子と、どんな関係があるんだ」

泉は小林の言葉に小さくうなずくと話し出した。

「あの日、社に帰ってお前のために小野田洋子のことを調べていた。そして父親が日本人遺族会の一員で『小野田貿易』という会社を営んでいる『小野田幸三』という男だとわかった」

泉は大きくため息をつくと話を続けた。

「彼の前歴を調べていく内に俺は寒気がしてきたね。小野田幸三は外国航路の船長をしていたんだ。五年前に彼は東亜商船を定年退職している。そして、再就職でまた外国航路の船長の職に就いた。その会社が、なんと『ライトカンパニー』だ」

小林の脳裏に夜の海に航跡を残して立ち去っていった巨大な貨物船が浮かんできた。

「ライトカンパニーで船長をしていた小野田幸三なら、覚醒剤の海上取引のことを知っていたはずだ。これは俺の推理だが、サングラスの男が小野田幸三と考えたら・・・」

「確かに奴は船に詳しかった」

小林は宮野にいきいきと指示をしているサングラスの男のことを思った。

「小野田幸三についてはそれだけじゃない。小野田は遺族会のメンバーとしてビルマを訪問している」

「どういうことだ」

「タイで墜落した航空機の事件だ。あの飛行機に乗っていた遺族の一員としてだ」

小林は航空機事故のことを考えた。そして、浮かんできた疑問を泉にぶつけた。

「俺の記憶だと、航空機事故は海上取引の前に起きたはずだ。するとお前が言うように、事故機に乗っていた小野田幸三は幽霊にでもならない限りは、サングラスの男として取引の現場に現れることはできないはずだ」

「そうだ。奴はお化けじゃない。奴は事故機には乗っていなかった」

「事故機に乗っていなかった」

小林は呟いた。

「つまり小野田は慰問団の予定より早く日本に帰ったんだ。奴は命拾いしたわけだ」

「・・・」

「命拾いした小野田は、覚醒剤を横取りした。そしてまた慰霊祭でも命を狙われた」

「慰霊祭には出席していたのか？」

「いや、娘が代理で出席した」

「洋子か」

「そうだ。小野田はまた命拾いしたわけだ。つまり今回の一連の出来事に、小野田幸三という男が絡んでるんだ」

「小野田には会ったのか？」

「わからん。さっぱり居場所が掴めん。奴の家にも行って見たが娘が居るだけで、父親の行方はわからないと言っていた」

「洋子に会ったのか？」

「お前が夢中になるのもわかるよ。綺麗な人だった。今思えば父親のことをかばっていたのかもしれない」

泉はポケットから紙切れを取り出すと、小林に差し出した。

「これはお前に頼まれた女の住所だ」

そして思い詰めた顔で小林に言った。

「一週間ほどバンコクに行く。奴の辿った道を歩けば何か掴めるかもしれん」

泉の視線は位牌に注がれていた。

泉と別れた後、小林はメモに目を通すべきかどうか迷っていた。そして、洋子を訪ねたところで、彼女の傷を深くするだけだと思い、メモを小さくたたんで車のダッシュボードにしまい込んだ。

その後、小林の身の回りには何事も起こらずに時が流れていった。

泉と別れて十日ほど経った頃、小林の留守番電話にメッセージが入っていた。

「スクープだ！小林、スクープだ！」

泉の声は弾んでいた。

『とうとう事件の真相を掴んだぞ。早く日本に帰って書きたい気分だ。今バンコクのホテルにいる。これから街を観光して、今日の最終便で日本に帰る。お前に会うのが楽しみだ。俺にとって、一世一代のスcoopだ』

泉の電話に小林は不安な気持ちを憶えた。

それは泉の書く記事で、一人の女性の心がズタズタに切り裂かれてしまうだろうと思われたからだ。

泉はタイで何もわからないままに、日本に帰ってくるべきだったんだ。

小林は立ち上がると窓の外を眺めた。

しかし、今回の事件では大勢の人が犠牲になっている。事件の真相を明るみにすることは仕方のないことなのかもしれない。その結果、一人の女性がどんなに傷つこうとも・・・。

小林は重苦しい気持ちで、窓の外を眺めていた。そしてその視線の先には、ちらちらと粉雪が舞っていた。

ぼんやりとテレビを見ていた小林の目が画面に釘付けになった。

(そんな馬鹿な)

小林は首を小さく左右に振った。

テレビの画面には、泉の写真がクローズアップされていた。

小林はリモコンを手にとると、テレビの音量を上げた。

『A新聞の記者である泉秀明さん34歳は、現地時間の午後2時頃、タイの首都バンコクの路上で、何者かにより射殺されました。警察では強盗目的のストリートギャングの仕業と見て、犯人の行方を追っています。泉さんは取材のためバンコクを訪れたもので・・・』

小林はテレビのスイッチを切ると、頭をぐっとソファーにもたれ掛け、そのまま瞼を閉じた。

（泉までも殺されてしまった。それも白昼堂々と……。強盗の仕業なんかじゃない。明らかに泉の口を封じる目的だ。泉はタイで何を掴んだんだ？）

小林は、ゆっくりとソファから立ち上がると、テーブルに置かれていたホンダの鍵を握り締めた。

ビルの外はみぞれ交じりの雨だった。

小林は足早に駐車場に向かい、ホンダに乗り込んだ。そしてダッシュボードを開き小さくたたんだメモを取り出した。寒さのためか、これから起こす行動への不安感のためか、メモを開こうとする指は、小刻みに震えていた。

『北九州市門司区白野江1264』

小林は地図を広げて、メモに書かれてある住所を確認し、脳みそに刻み込んだ。そして、暖気の終わったホンダを駐車場から滑らせた。

和刈布の海岸線を抜ける辺りから雨はいよいよ本降りになってきた。

小林はワイパーを強に合わせた。

洋子と初めて会った時も、今日と同じどしゃ降りの雨の日だった。

小林はフロントガラスに打ち付けてくる雨を見て思った。

洋子はあの日なぜあの場所にいたんだろうか？

小林は子犬を抱いて雨に濡れていた洋子のことを考えた。

彼女も今回の事件に関わりを持っていたんだろうか？いや、彼女は爆弾事件の被害者なんだ。そんなことはあり得ない。しかし、俺が彼女と出逢ったのは『和田』に行くときだった。そして彼女のほうを『和田』からの帰りだったと考えたら・・・。

そうだ！彼女も『和田』に行ったんだ！

彼女は事件の何かを知っている！

小林は自分の想像に思わず身震いした。そして病院で、家族のことを尋ねたときに彼女が見せた暗い表情が頭に浮かんできた。

車はコンテナのターミナルを過ぎ、門司インターに続いているコンテナ街道を走っていた。トンネルを二つくぐり抜け、ゆったりした坂を下りきった信号を右に曲がると、道は山に向かって登りになっていた。その道を50メートルほど走ると、二階建ての白い家が見えてきた。小林はその家の前に車を横付けにすると、表札を確認した。

『小野田幸三』（この家だ）

ガレージには子犬をひっかけた白いスバルが停まっていた。

小林はこれから自分が洋子に対して行う残酷な質問に、重い足取りで車から降りた。

雨はだいぶ小降りになっていたが、止みそうな気配は見えなかった。

小林は躊躇いがちに、インターホンのボタンを押した。しかし、中からは何の応答もなかった。続けざまにボタンを押し続けると、消え入りそうな声でインターホンから女の声が聞こえてきた。

「どなたですか？」

(洋子だ) 小林は思った。そして

「小林だ」

と、答えた。

「・・・」

しばらくの沈黙の後に、ドアのロックが解除される音が聞こえてきた。

洋子は小林の顔を見るとニッコリと微笑んできた。小林はこの笑顔をぐちゃぐちゃに
してしまうのかと思うと、胸が痛んだ。

「すみません」

洋子がペコリと頭を下げた。

「何かお礼をしなければいけないと思っていたんですけど・・・」

洋子は言葉を濁した。

「いや、礼なんかいらない」

小林は言った。

「中に入ってお茶でも飲んで下さい」

「ここでいい、夕食の誘いに来たんじゃないんだ」

洋子の顔が一瞬キョトンとした。そしてクスクス笑い出した。しかし小林の真剣な顔に笑顔を無くしていった。

「小野田幸三に会わせてくれ」

小林は言った。

「えっ」

洋子が小さく声をあげた。

「君の父親に会いたいんだ」

「父はいません」

「どこに行ったら会える」

「知りません」

「嘘だ」

「嘘じゃありません。本当に知らないんです。

大きな瞳には、何のものにもたじろがないぞという決意が表れていた。そして、

「父に何の用なんです」

と、強い口調で聞き返した。

（洋子は本当に何も知らないのだろうか？）

小林の気持ちに迷いが生まれていた。しかしそんな気持ちを振り切るかのように、小林は洋子に幸三のことを問い詰めだした。

「俺の友達二人が誰かに殺された。俺はその真相が知りたい。小野田幸三が知ってるんだ」

洋子の顔に驚きの色が走った。

「嘘です」

と、強く否定した。

「頼む。父親の居場所を教えてくれ」

「わたし、何も知らないんです」

「君は『父が迎えに来たから病院を出る』と、言づてをして、俺の前から姿を消した。その君が、父親の居場所を知らないはずがない」

「本当です。本当に知らないんです」

「君は知ってる。君は嘘をついている」

「もう帰って下さい。あなたに話すことは何もありません」

洋子は叫ぶと、ドアを閉めようとした。しかし小林は一瞬早く、ドアの隙間に靴を突っ込み、力を込めてドアを引っ張ると、体を玄関の中に滑らせた。

「君が話すまで、俺は帰らない」

「帰らないと警察を呼びます」

「・・・・・・・・」

小林は玄関の電話を取り上げると、

「さあ早く電話しろ。そして、しつこいノミ屋が脅かしてるというんだ。俺はどこにも逃げも隠れもしない。さあ、警察を呼ぶんだ」

と、強い口調で受話器を押しつけた。

「もう帰って下さい」

洋子の声は泣き声に変わっていた。

「小野田幸三は、シンジケートの奴らから麻薬を横取りした。そのために仲間と思われた俺の友達は、組織の奴らから殺された」

「嘘です。父はそんな人じゃありません」

洋子の瞳が滲んできた。

「小野田幸三は墜落した航空機に乗るはずだった。しかし、彼は予定を変更し、飛行機には乗らなかった。そして、犠牲者の合同慰霊祭にも出席しなかった。君が父親の代理として出席し、あの爆弾事故にあった。俺のもう一人の友達も、事件の真相を探るためにタイに行き、そこで殺された」

「嘘です」

言葉にならない声が聞こえたかと思うと、堰を切ったように、洋子の目から大粒の涙が頬を伝わりだした。小林はその涙に胸が締め付けられるような思いだった。

「小野田幸三のために、たくさんの人が死んでるんだ。知ってることがあったら教えてくれ」

洋子は両手で顔を覆うと、玄関の敷居に座り込み小さな肩を小刻みに震わせ始めた。小林はどうすることもできずに、肩の震えを茫然と見つめていた。

（彼女は何も知らなかったんだろうか？俺はただ一人の女を苦しめただけなんだろうか？）

小林は自分を責めた。そして穴があったら逃げ込みたい気分だった。

しかし洋子をこのままにして立ち去ることもできずにいた。そんな小林を涙であやしく光っている黒い瞳が見上げた。

「父を助けて下さい」

洋子が突然言った。

「父は多分門司のヨットハーバーにいると思います」

洋子の声はかすれがちだった。

「船の名前は『YOKO』です」

「よーこ？」

「アルファベットで、ワイ・オー・ケー・オーです」

「わかった」

ドアを開けて外に出ようとする時、小林を洋子が呼び止めた。

「待って下さい。私も一緒に行きます」

そして着替えのために、奥の部屋に引っ込んだ。小林は洋子が来るのを、車の中で待つことにした。

（彼女は父親のことを助けてくれと言った。一体何から助けて欲しいんだろう？彼女は事件のことを全て知っているのだろうか？）

車のウインドを叩く音で小林は我にかえた。

ロックを外し、車に乗るように手で合図すると、ジーンズに黒のロングコート姿の洋子が助手席に乗り込んできた。

「門司のヨットハーバーだな」

小林は念を押すと、車のアクセルを強く踏み込んだ。山道を下りながら、小林は心に引っかかる疑問を洋子にぶつけた。

「俺と最初に会った雨の日、なぜあの場所に君はいたんだ？」

「あの日は父の後を尾けた帰りだったんです」

「どうして父親の後を尾けたりした？」

「父は慰問団で戦地を訪れました」

洋子が話し出した。

「そして慰問で帰国した後、何か悩んでいました。私は父の思い詰めた様子を見て、どうしたのか尋ねました。しかし父は『なんでもない』と、言って笑うだけでした。そして、父と私が夕食を食べているときに、あの飛行機事故のことがニュースで放送されたんです。それを見ていた父は突然夕食を食べるのをやめ、書斎に閉じこもりました。私が父の様子を見るために書斎に入ると父は涙を流して泣いていました。私は父の涙を初めて見ました。母が死んだときでさえ泣かなかった父です。そしてその後、父はどこかに電話をすると家を出ました。翌日、私は心配になってこれから行くヨットハーバーを訪ねたんです。父は家にいないときは、いつも『YOKO』のところに行っていました。父は本当に船の好きな人なんです。船は父にとって人生そのものでした。そして父は、私の思った通り『YOKO』のところに来ていました。私がヨットハーバーに着いたとき、父は丁度車で出かける所でした。私は父の後を尾けました。

すると父は門司港で人を乗せ、そのまま山陰の漁村まで走ったんです。そして、漁港に停泊していた漁船に乗り込みました。しかし父は船に乗り込んだだけで、すぐに降りてきました。その後父は近くのレストランに、門司港で乗せた男の人と入りました。私は昼食でも食べるのだろうと思って、車の中で父が出てくるのを待ってました。しかし父はいくら待っても、レストランに入ったまま出てきませんでした。私は五時間くらい待っていました。だけど父の出てくる気配はありませんでした。それで、諦めて帰ることにしたんです。その帰り道だったんです。あなたと出逢ったのは・・・」

小林は洋子の話を聞いて『小野田幸三』がサングラスの男であることを確信した。そして、漁船に乗り込んだのは時限爆弾を仕掛けたんだろうと思った。

しかし、何が小野田幸三にそんな行動をとらせたんだろうか？

その理由を泉はタイで突き止め、殺された。

小野田幸三に会えばその理由もわかる。小野田幸三だけが、その理由を知ってるんだ。

小林はアクセルを踏んでいる足に力を込めた。車はコンテナ街道を来た方向に引き返していた。トンネルを一つ抜け、二つ目のトンネルを50メートルほど入ったところで、トレーラーが道を塞ぐように止まっていた。そしてトレーラーの前では、運転手が小林の車に停止するように手を振っていた。

（事故か）小林は思った。

ルームミラーで後方を確認すると、後続車のヘッドライトが見えていた。小林は後続車に注意を促すために、ハザードランプを点滅させ車をトレーラーのそばで停車させた。パーキングブレーキをかけ、車を降りようとした小林を

「ドーン」

と、いう音と共に猛烈な衝撃が襲った。その衝撃で小林は開きかけたドアから車道に弾き飛ばされた。それを見てトレーラーの運転手は小林に走り寄ってくると、冷酷な薄笑いを顔に浮かべ脇腹に強烈な蹴りを入れてきた。

「うっっ」

不意を突かれた小林は小さくうめき、アスファルトに膝を落とした。その時、小林の耳に女の悲鳴が聞こえてきた。

(洋子がやられる！)

小林はとっさに蹴りかかってきた男の右足を体で受け止めると、男の顔面にパンチを繰り出した。拳は鼻にめり込み男がよろよろと後ずさる。再度、男の顔面にパンチを繰り出そうとした小林の後頭部に鈍い痛みが襲ってきた。その一撃で戦意を失った小林は、崩れるようにアスファルトに倒れていった。そして朦朧とした小林の髪を誰かが掴み、顔をねじり上げた。

「小野田に伝えろ。娘はもらった。ヘロインと交換だ。明朝六時に『巖流島』だ。いいな、わかったな」

天の彼方から声が聞こえ、男の強烈な置き土産がみぞおちにめり込んできた。

「くう」

声にならない呻き声を上げて、小林は道路をのたうちまわった。そんな小林のそばを、黒塗りの外車が走り去って行った。

(ちきしょう。ふざけやがって・・・)

小林は咳き込みながらホンダに乗り込むと、イグニッションキーをひねった。

しかし、セルモーターが空回りするだけで、相手の車を追いかけようとする意志をホンダは見せようとしなかった。

ルームミラーに目を通すと、ぐちゃぐちゃに碎け散ったハッチバックのリアウインドが小林の目に映ってきた。

「くそったれ！」

小林は全力で走り出した。しかし、洋子をさらった車はすでに小林の視界からは消え去っていた。トンネルの出口を目指して道路を走っていた小林の背中を、けたたましいヤンキーホーンが襲ってきた。その音に振り向いた小林をヘッドライトが照らした。ヤンキーホーンを連打しながら向かってくる車に、小林は両手を大きく振って立ちふさがった。

「キィー」

ブレーキの音も凄まじく、車は僅か1メートルほど手前で急停止した。

ゴムの焼ける匂いが、小林の鼻をついてきた。

「死にてえのか馬鹿野郎！」

車の窓を開け、長髪で金髪の男が怒鳴っている。

小林は金髪ににじり寄ると、上着の内ポケットに手を入れた。

「おっ、やるのかこの野郎」

金髪が眉間にしわを寄せ、威嚇の体勢に入った。しかし、目の前に差し出された一万円札を見て首を捻った。

「車が故障した。乗せてくれ」

「どこまでだい」

「門司のヨットハーバーだ」

金髪はうなずくと、助手席に乗るよう目配せした。

「急ぎで頼む」

小林の言葉に金髪はヤンキーホーンを突撃ラッパのように鳴らすと、この世の終わりのようなドライビングテクニックを披露しだした。

この男にとって、交通規制は何の意味も持って無かったのだ。

一度ねじの切れてしまった金髪には、全裸のかわいこちゃんに『やさしく走って』と、言わせる以外に、頭を正常に戻す方法が無いように思われた。

「着いたぜ」

金髪が声を掛けた。

小林は大きくため息をつくと、車を降りた。そして金髪はタイヤを軋ませ夜の街に戦場を移していった。

すでに海はとっぴりと暮れきって、どしゃ降りの雨は、細かい雨に変わっていた。
『YOKO』はマリーンの棧橋に係留されていた。

全長10メートルほどのクルーザーで、そのマリーンの中でも、大きさと豪華さで他を
圧倒していた。小林は足早に『YOKO』に近づいた。

しかし『YOKO』の窓にはカーテンが引かれ、そこから漏れてくる明かりも見えず、人
の居る気配が全く感じられなかった。小林は棧橋からクルーザーに飛び移ると、キャビ
ンに通じるドアに手をかけた。

すると、ドアには鍵がかかってなく、「キィー」という音をたててドアが開いた。

「動くな」

冷たい感触が頬に伝わる。その声を無視して後ろを振り向こうとする小林に男は言
った。

「これは脅しじゃない」

そして頬に当てていた銃を強く押しつけてきた。

「そのままゆっくりと歩け」

男の言葉に小林は、薄暗いキャビンの中に足を進めて行った。

そして背後で、ドアの閉まる音がしたかと思うと、キャビンの中に明かりが灯った。

「その椅子に腰を掛ける」

小林の目の前の椅子に腰を下ろし、男を見た。

「やっぱり、あんただったか」

小林の前には、黙って海を見つめていたサングラスの男がいた。

「何の用だ」

男の手には、小林の頭に狙いを定めた銃が握られていた。

「小野田幸三だな」

小林の問いかけに、男は頬をぴくりと動かした。

「娘さんがさらわれた。あんたが奪ったヘロインと交換だ」

突然、男は突きつけていた銃を下ろすとがっくりとうなだれた。

「奴ら、娘にも手を出したか・・・」

幸三は放心したように呟くと、銃をテーブルの上に置き、力尽きたように椅子に座り込んだ。

「あんたを訪ねる途中だった。明日の六時に巖流島だ」

「そうかわかった」

幸三は小さくうなずいた。

「あんたのためにたくさんの人が犠牲になってる。あんたは何をやらかそうとしてるんだ」

突然、幸三は両手で顔を覆い肩を震わせ始めた。小林は幸三の震える肩と洋子の小さな肩がダブって見えてきた。

（この親子は一体何を悲しんでいるんだ？何がこの親子をこんなに苦しめてるんだ？俺は正義の使者のつもりで事件のことを嗅ぎ回り、その結果、周りの者を不幸に陥れただけなんじゃないか。俺が泉を訪ねなければ、泉だって殺されることはなかったんだ。そして今度はこの親子を苦しめてる。俺のやったことは一体何だったんだ・・・）

そんな小林の感傷を遮るように幸三が口を開いた。

「戦争は終わってなかった。今も戦争は続いていたんだ」

小林を見つめる幸三の表情には疲れが見えていた。

「今度の慰問団の責任者に選ばれた私は、現地の視察でビルマを訪れた。」

幸三は大きくため息をつくと、

「そして、私に接触してくる男がいた。その男は私に一枚の写真を見せた。その写真には、私の母と子供の頃の私が写っていた。それは父が戦地に赴くときに一緒に持って行った写真だった。そして男は私に『あなたの父は生きている』と言うんだ。戦死したと思っていた父は、生きてるというんだ」

幸三の声からは気持ちの高ぶりが伝わってきた。

「私は父に会わせてくれるように、男に頼んだ。だが、男はそれは無理だと言った。私の父はゲリラとして未だにビルマ政府と戦っていると言うんだ。資金不足と餓えの中で・・・」

「あんたはそんな話を信じたのか？」

「ああ、信じた。私に接触してきた男は『マサト』と名乗った。父と現地妻との間にできた子供だと、私に言った。そしてマサトは私に恐るべき提案をしてきた。ヘロインを日本でさばくようにと私に言うんだ。そしてそれは、私の父の頼みでもあると・・・。バンコクまでのルートはすでに確保してある。後はそれを日本に私が運び込んでさばくようにと言うんだ。当然私は断った。素人の私には無理な話だと言ったんだ。だがマサトはどこで調べたのか、私が何度か麻薬の運搬に関わっていたことを知っていたんだ」

「ライトカンパニーか」

「そうだ。最初は麻薬の運搬をしていたなんて思わなかった。船員達が小遣い稼ぎに密輸をやっているくらいに考えていた。それが会社ぐるみで麻薬の密輸をやっていたとは・・・」

幸三はふらふらと立ち上がると、キャビネットから酒とグラスを取り出した。

「飲めるんだろう」

小林がうなずくと、幸三はグラスに酒を注ぎだした。

「ライトカンパニーとは、麻薬のシンジケートが資金を出して経営している貿易会社だ。その表の顔を利用して、アメリカやヨーロッパ、そして日本にヘロインを運んでいる」

小林は幸三の話に寒気を憶えていた。

「シンジケートの奴らはマサトの動きに気づいて、自分たちの日本での市場を守るために、マサト達を潰しにかかった。その結果、奴らは私の命を狙うようになった」

「航空機の事故か？」

「私はマサト達から逃れるために、予定より早く日本に帰った。しかし、シンジケートの奴らは私の命を狙った。日本で事故のことを知った私は、シンジケートの奴らの仕業だなとわかったんだ」

「あんた一人を殺すために、みんなを巻き込んだっていうのか」

「君は知らないんだ、奴らの怖さを・・・」

幸三はグラスの酒を一気に飲み干した。

「私のために関係のない人が大勢死んでしまった。そして、私はやつらに復讐することを誓った」

「それで、あの夜、ヘロインを横取りしたのか」

「日本にいるシンジケートの『チャン』という奴を買収して、取引の日時と場所を知ったんだ・・・」

「そのために俺の友達は、あんたの仲間と思って殺された」

「あの日に限って、この船のエンジンの調子が悪かった。なんせ急なことだったんで、修理してる暇がなかった。それで船を雇うことを思いつき、それなるべく人目につかないところを選んだ。今思えば『YOKO』が犯罪に使われるのを嫌がったのかもしれない」

「しかしあんたは俺達を殺そうとした」

「いや、信じてもらえないかもしれないが、私は君たちを殺すつもりはなかった。しかしチャンは君たちを殺そうとした。それでチャンの注意を引くために、あの場から逃げ出したんだ。だが、そのチャンも組織の奴らから殺された。そしてシンジケートの奴らは私への報復のために、慰霊祭の会場にまで爆弾を仕掛けた」

「・・・」

「私は何の関係もない大勢の人を、無差別殺人の犠牲にってしまった」

「そして今度は自分の娘まで犠牲にしようとしている」

小林は幸三に冷たく言い放った。

「私は死ぬ覚悟はできている。だが、娘は奴らに殺させるわけにはいかない。娘は優しい子だ。頼む、私に手を貸してくれ」

幸三はテーブルに置いた銃を取り上げると、

「これはトカレフというロシアの軍用銃だ。これを使ってくれ」

と、差し出した。

小林は鈍い光を放っているその銃をじっと見つめた。そしてポツリと言った。

「銃はいらない。俺には人を撃てない」

「銃なしでは奴らから娘を取り返せない。娘のためだ。これを使ってくれ」

小林は洋子のことを思い、銃を幸三から受け取った。

「娘は絶対に取り戻す」

幸三の顔には強い決意が表れていた。

船のエンジン音で小林は目覚めた。

時計を見ると、午前四時だった。クルーザーの簡易ベッドを抜け出し甲板に出てみると、外はまだ暗く、空には星が出ていた。船は関門海峡の流れに逆らい、巖流島を目指しうねりの残る海を切り裂いていた。そしてその行く手には、下関の南部に属する彦島の明かりがぽつぽつと灯っていた。

潮の匂いと波がなければこの陸に囲まれた海峡は、大きな河のような錯覚を見るものに憶えさせた。三月の海峡は春にはまだ遠く、冷たい風が吹き付けては小林の体を芯まで凍らせていた。

「もう起きたのか」

幸三が舵を取りながら言った。

「あんたは寝なかったのか」

幸三は何も答えなかった。

小林はうつらうつらベッドの中で時間を過ごしていた時、幸三がスタンドの明かりの下で、何か作業をしているのを知っていた。

「君には娘のことで礼を言わなければいけなかったな」

「俺は何もしてない」

小林は答えた。

「娘の見舞いに来たときに、君を病院で見かけたときは本当に驚いた」

「病院で会ったって？」

「私が病院の前まで来たときに、君が病院を出てくるところだった」

「それで娘さんを連れ出したのか」

「そうだ。まさか娘と君が知り合いだったとはな。人生ってのは皮肉なもんだ」

幸三は笑っていた。

小林はその笑顔を見て、幸三の決意を感じ取った。

（幸三は死ぬ気だ。自分の巻き添えで死んでいったたくさんの人たちの罪滅ぼしのために、そして娘のために……。それは誰にも止めることができない。彼は命の捨て場を自ら選び、その炎を燃やし尽くそうとしている）

小林は幸三の死が、無駄に終わらないことを願った。そしてそれは自分のことでもあると実感していた。

「娘さんをどうやって助けるつもりなんだ」

「わからん。奴らは残忍だ。無事に娘を解放してくれるとは思えん」

幸三の顔から笑いが消えていった。

「私に何が起こっても構わないでくれ。君は娘を助けることだけに集中してくれ」
小林は小さくうなずいた。

そして内ポケットにしまっているトカレフの感触を上着の上から味わった。

「もうすぐだ」

幸三の言葉に小林は前方を見つめた。星明かりの下で、陸地がぐんぐんと迫っているのがわかった。クルーザーは大きく旋回すると、船着き場を目指した。そして、船着き場の前の防波堤にクルーザーを横付けすると、船を係留した。

幸三は船倉の蓋を開けるとミカン箱を取り出し、甲板の上に積み出した。

「ヘロインか？」

小林は言った。

「そうだ。悪いが防波堤の上でこれを受け取ってくれ」

小林は船から防波堤に移ると、幸三からミカン箱を受け取り、そのままそこに積み上げた。箱は全部で20箱あった。

「これで全部だ」

幸三はそう言い残すと、キャビンの中に消えていった。

(こいつのために、人がたくさん死に、洋子は誘拐された。そして男がまた命を捨てようとしている。馬鹿げてる、全く馬鹿げてる)

小林は積み上げられたミカン箱を苦い思いで見つめていた。

「何を考えてる？」

小林が振り向くと、ミカン箱を抱えた幸三が立っていた。

「まだ残ってたのか？」

小林は幸三の持っているミカン箱を見た。

「これは切り札だ」

幸三は言った。

「切り札だって？中に何が入ってる？」

「ダイナマイトだ」

幸三は積み上げられたミカン箱の中にそれを下ろすと、袖をまくり上げた。

「そして、これがスイッチだ」

幸三の手首にはテープで止められた無線機のような物が付いていた。

「リモコンか」

「そうだ。このボタンを押すと、そいつは吹っ飛ぶ」

幸三は赤いボタンを指すと、そのまま指で押し込んだ。

小林はそれを見て思わず目を閉じた。

「大丈夫だ。まだ電源を入れていない」

幸三は笑っていた。

「いいか、隙を見て私はこれを吹っ飛ばす。その時奴らの注意が爆発に向くはずだ。君はそれを合図に娘を助け出してくれ。そしてそのまま船に乗り込んで海上に出ろ」

「あんたはどうする？」

「私はここで奴らを食い止める」

「それは駄目だ。俺には船の操縦ができない」

「大丈夫だ。私が今から教える。いいか、くどいようだが決して私に構うな。チャンスは一度きりなんだ。それを逃せば三人とも殺されてしまう」

「わかった」

小林は幸三の思いを察してうなずいた。

クルーザーの運転は、小林の考えていたよりも簡単だった。一時間も運転していれば何とか自分の思うままに動かすことができるようになった。

「もうすぐ時間だ。このまま戻ろう」

時計を見ながら幸三が言った。

小林はクルーザーを旋回させると巖流島を目指した。

「あんたはこの計画が、うまくいくと思っているのか？」

小林は言った。

「わからん。ただ娘を無事に取り戻したいだけだ。君は何も考えずに私の言ったとおりに行動してくれ。私に言えるのはこれだけだ」

（幸三は娘のために自分の命を投げ出すつもりだ。ただ、それだけだ。だが、果たして俺に人を撃てるんだらうか？相手は悪人とは言っても人間だ。殺したりできるだらうか？）

小林はふと思った。

そしてクルーザーのスロットルをあげると、船着き場を目指した。防波堤が近づくとつれ、小林はスロットルを戻し、クルーザーのスピードを緩めた。

「そのままゆっくりと棧橋に近づけ」

幸三が言った。

小林は慎重に防波堤の切れ間を抜けると、棧橋に船を寄せていった。

「スピードを落として、そのまま右に舵を切れ」

幸三の指示で船は徐々に棧橋に近づいていった。船が棧橋に十分近づいたところで、幸三はロープを投げ入れ棧橋に飛び移った。

「うまいもんだ」

ロープを結びながら幸三が言った。

「あんたのおかげだ」

小林は船を降りた。

そして無性にタバコが吸いたくなかった。思い切り煙を吸い込んで吐きだせば、どんなに今の緊張感から解放されるかわからないと思った。

その時、突然波の音に逆らうように東の空から爆音が聞こえてきた。小林はうっすらと青みがかかった空を見上げた。

「奴らだ」

幸三が呟いた。

ヘリコプターは低空飛行で島の稜線をかすめるように近づいてきた。そして二人の頭上で二度旋回すると、ゆっくりと棧橋の前の空き地に砂埃を上げながら降りてきた。

ヘリコプターは着陸すると後部のドアが開き、そのドアから機関銃を構えた男が二人降りてきた。小林はその光景に思わず生唾を飲み込んだ。そして、上着のポケットにしまっているトカレフに思わず手をかけた。

「安全装置を外しとけ」

幸三が小林に言った。

小林が安全装置に指をかけていると、皮のコートを覆った男がヘリコプターから降りてきた。そして怒鳴った。

「小野田！ヘロインは持ってきたか」

「娘は無事か！」

幸三が怒鳴り返す。

「心配ない」

男はそう言うと、ヘリコプターに向かって声をかけた。

男の合図でドアから洋子の姿が見えてきた。

「お父さん！」

洋子が叫んだ。

「大丈夫だ！もう心配ない」

幸三が答えた。

しかし、その腕は一緒にヘリコプターを降りてきた長身の男にしっかりと掴まれていた。

そして皮のコートの男と長身の男に挟まれたまま、よろよろと幸三の元に近づいてきた。

「小野田。ヘロインはどこだ」

男が足を止めた。

「娘と交換だ」

幸三が言った。

「ヘロインが先だ」

男は洋子の喉にピストルを突きつけた。

「やめろ！娘は関係ない」

幸三が叫んだ。

「小野田。お前には指図する権利はないんだ」

「やめろ！娘は関係ない」

男は幸三の言葉を見殺しするように、洋子の首筋を銃身で撫でまわした。洋子はピストルの愛撫から顔をのけぞらし逃げようともがいたが、長身の男に髪を掴まれて身動きが取れなかった。

「やめろ！わかった。あそこだ」

幸三は手に持っていたライトで堤防に積まれたミカン箱を照らし出した。

「確かめろ！」

コートの中の男の合図にへりのそばで機関銃をかまえていた男が防波堤に走った。

「約束は守った。娘を返してくれ」

幸三が怒鳴った。

「中身を確認してからだ」

「中身は本物だ」

「それはもうじきわかる」

男は洋子をじっと見つめた。

「それにしても綺麗な女だ」

男は嫌がる洋子の首筋を銃身で撫でまわした。

「やめろ！」

幸三の目が怒りに燃えている。

「小野田。全てはお前が蒔いた種だ」

コートの男がニヤリと笑った。

「先に手を出したのはお前達だ。私はヘロインを日本に持ち込む気などなかった。それなのに、なぜ飛行機を爆発させたりした」

「お前は知りすぎていた。いずれにしろ殺すつもりだった」

「それなら私一人を殺せば済むはずだ。大勢の人を犠牲にしなくても良かったんだ」
二人のやりとりを小林はじりじりした気持ちで聞いていた。洋子は長身の男に体の自由を奪われたまま、虚ろな目で幸三を見つめていた。

「中身はヘロインだ！」

防波堤に走った男が叫んだ。

「よし、そのままへりに積み込め」

コートの男は叫んだ。そして、

「お前達には死んでもらう」

と、ピストルを小林と幸三に向けた。

「ヘロインは戻ったんだ。娘を返してくれ」

幸三が言った。

「だめだ」

男はニヤリと笑った。

「殺すなら私一人を殺れ。この二人は関係ない」

「心配するな。女は殺さない。この体で稼いでもらう」

「娘は関係ない」

幸三は男に詰め寄った。

そんな幸三に男は狙いを定めた。

「小野田。地獄に行け」

瞬間、幸三は自分の手首を掴んだ。

「ドーン」

大音響がこだまし、暁の空に白い粉を吹き上げた。

その音を合図にトカレフを抜き取った小林は、注意を奪われたコート of 男に引き金を絞った。

「パン」

小林の手に衝撃が走る。

そしてその音に続いて、機関銃の短い連射音がこだまする。肩を押さえたままコート of 男が弾き飛び、長身の男は腰をくの字に曲げ、ダンスをするように地面に倒れていた。

「今だ！洋子、走れ！」

幸三が叫んだ。

その手にはいつの間にか短機関銃が握られていた。

「お父さん！」

洋子が走り寄ってくる。しかしそれを狙ってヘリコプターから機関銃の連射音が襲ってきた。

「洋子！伏せろ、危ない」

走り寄ってくる洋子をかばって幸三が立ち上がった。そして、

「うっ」

と、小さく呻くと、洋子を抱えたまま岩陰に倒れ込んだ。

「大丈夫か？」

小林は幸三ににじり寄った。

「ああ、肩をやられただけだ」

幸三はうなずいた。そして洋子に顔を向けるとひとこと言った。

「すまなかった」

洋子が幸三にしがみついた。

そんな洋子に幸三は言い含めた。

「これからは一人で生きるんだ」

しかし洋子はいやいやをするように、髪を振り乱した。

「洋子。わかってくれ」

幸三は、洋子を突き放すと小林の手を握ってきた。

「後は頼んだぞ」

幸三が笑いかけた。

そして、へりに向かって短機関銃を乱射しながら走り出した。それはまるで敵兵に向かっていく日本兵の姿だった。

「お父さん！」

幸三の後を追おうとする洋子の手首を小林は掴んだ。

「一緒に来るんだ」

しかし洋子は小林を睨みつけると、思いっきりその腕に噛みついてきた。小林の腕にあつい痛みが走る。

「すまない」

小林はつぶやくと、洋子のみぞおちに拳を打ち込んだ。

「あっ」

洋子は小さく声を出し、その場に倒れ込んだ。

小林は洋子を抱きかかえると、クルーザーに急いだ。その背後を、

「パラパラ」

と、乾いた連続音が襲ってくる。コンクリートの破片が砂埃を上げて弾き飛んでいく

。

もやいを解き、クルーザーに飛び移った小林をかすめるように、弾が船体にめり込んできた。

小林は洋子を抱きかかえ、キャビンに飛び込んだ。そしてクルーザーのエンジンを全開にすると、船着き場を飛び出していった。

沖合いを快調に走るクルーザーにヘリから発射される機関銃の連射音が近づいてくる。バリバリという衝撃がキャビンの中にこだまし、クルーザーのエンジンがプスプスと駄々をこねだした。

「ちきしょう」

小林は、スロットルを倒し続けた。

しかしエンジンはそのまま静かに止まっていった。ヘリコプターは海上に停止したクルーザーの前方で旋回すると、機関銃を乱射しながら迫ってきた。操縦席の窓越しにそれを見た小林は気絶している洋子の上に覆い被さった。バリバリと音を立てながらクルーザーの屋根を機関銃の弾が打ち抜いてくる。

そして、小林と洋子の数センチそばの床板に弾がめり込む。体に何度も悪寒が走り、吐き気が襲ってきた。

ヘリコプターの遠ざかる音に小林は起き上がり、洋子の体をベッドの下に押し込んだ。

そしてキャビンを飛び出ると、旋回してくるヘリに向けてトカレフの弾の尽きるまで引き金を引き続けた。しかしヘリコプターは何事もなかったように爆音を響かせながら、またクルーザーに迫ってきた。ヘリのドアから体をのけぞらした男が、機関銃の狙いを小林に定めた。反射的にキャビンに逃げ込む小林を機関銃の連射音が追ってくる。瞬間、小林は洋子を押し込んだベッドの下に潜り込んだ。その直後、クルーザーを引き裂きながら、弾の雨が降り注いでくる。死の予感が何度も頭をかすめる。ヘリの遠ざかる音に小林は閉じていた目をそっと開けた。その顔を洋子の目が虚ろに見つめている。そして突然目を見開くとベッドの下で暴れ出した。

「落ち着け！」

小林は洋子の体を押さえ込んだ。

しかし洋子は大声を上げながら小林に抵抗する。その時、その声をかき消すようにまた機関銃の連射音が、クルーザーを切り裂いてきた。そしてベッドに吊り下げていた支柱を弾が打ち抜いた。その衝撃でベッドは二人の上ののしかかってきた。

「うっ」

小林は呻いた。

「許してくれ」

小林は洋子にささやいた。

洋子は自分の置かれた状況がやっと理解できたのか、小さくうなずいた。そしてそのまま目を閉じると、小林の手を握り締めてきた。

（今度やられた、もうだめだろう）

小林は観念した。そして洋子と一緒に死ぬことがせめてもの救いだと思った。今、洋子をこの手に抱き締めたかった。しかし、のしかかったベッドのせいで体の身動きがとれなかった。小林は洋子の手の温もりを感じたまま、次の攻撃を待った。しかしその後、いくら待ってもヘリの攻撃は起こらなかった。

小林はもう自分は死んでしまったんじゃないかと思った。静かに目を開けると、洋子の顔がそこにあった。そして手の温もりも感じたままだった。

「起きろ」

小林は言った。

そして目を開いた洋子に、

「一緒にベッドをはねのけるんだ」

と、命じた。

二人でベッドをはね飛ばすと、洋子にじっとしているように言い、そっとキャビンから顔を出した。そんな小林の顔を朝の太陽が燦々と照らし出した。ヘリの姿はもうどこにも見えず、穏やかな朝日がクルーザーに降り注いでいた。

そして保安庁の巡視艇がゆっくりと近づいてきた。

警察の取り調べは、連日、長時間に及んだ。小林は取り調べの厳しさにクタクタに参っていた。

もう、どうでもいい気分だった。何度も同じ事を繰り返し聞かれ、自分の話してるのが、自分自身信用できなくなったいた。

そして二週間の拘留の末、小林は釈放される事になった。

警察は事件の社会に与える影響を考え、この事件を公表することを取りやめた。

そして小林には当分の間、警察の監視が付くことになった。それは幸いなことに和刈布署の石原の担当になった。

*

小林は石原に付き添われて、警察を出た。警察の前には洋子が待っていた。

「毎日来てる」

石原が言った。そして、

「俺は姿を消す。二人で飯でも食ってこい」

と、その場を立ち去った。

「歩こう」

小林は洋子にポツリと言った。

そして二人とも無言のまま、門司港の街並みを歩いた。

小林は何を話していいかわからなかった。そして洋子も少し遅れて、そんな小林の後ろを付いてくるだけだった。

ノーフォーク広場のベンチに腰を下ろし、小林は洋子に言った。

「街を出よう」

「えっ」

洋子が小さく声をあげた。

「一緒に街を出よう」

洋子は何も答えずに、ただうつむいただけだった。

「明日の12時、ここで待ってる」

小林は洋子にそう言い残すと、その場を立ち去った。

事務所に戻るとテーブルの上にメモがあった。

『車を直しておきました 田島』

小林はメモの脇に置いてあったホンダの鍵を見つめた。

そして、田島に置き手紙を残すと、荷造りを始めた。

洋子は来なかった。

（自分と一緒に居ればいつまでも事件のことを思いながら生きていかなければいけない。彼女はそうすることを望まなかった。もう自分の前に、二度と姿を現すことはないだろう）

小林の足元にはやめたはずのタバコの吸い殻が散らばっている。

（これを吸い終わったらこの場から去ろう。この火種の尽きる時が約束の終わる時だ）

小林は最後の一本を時間をかけて吸った。そしてフィルターに灰が届くのを見届けて海に投げ捨てた。

（東に向かおう）

小林は漠然と思った。

門司港インターから中国自動車道にホンダを乗り入れた。関門橋から見る眺めは今日が最後だ。小林はゆっくりと車を走らせた。

夕日が西の空にかかり、海峡を真っ赤に染め上げていた。その時突然胸のつかえが喉にこみ上げ、目頭を刺激してきた。

そして涙が止めどなく流れ、小林の頬を濡らしつづけた。

その涙の訳が、洋子との別れなのか、街を離れる寂しさなのか、小林には解らなかった。感情の高ぶりを抑えきれない自分がそこにいること以外は・・・。

関門橋を渡り終わると、下関インターの標識が視界の片隅ににじんできた。小林は左のウインカーを点滅させた。

（結局、俺は街を離れる事ができない）

小林は下関インターで降りると、関門トンネルを抜けて門司港に帰ってきた。

事務所に戻りソファに横たわると、体全身の力が抜けてきた。そしてテーブルの上に置いていた田島への手紙をびりびりに破くと、ゴミ箱に投げ入れた。

（いずれ時の流れが、全ての出来事を記憶の片隅で風化させていく）

「ただいま帰りました」

田島だった。

「銭は取れたか」

小林は言った。

「ええ、まあ」

事件を知らない田島は相変わらず口ごもっていた。

「あれから20年か・・・」小林はフツとため息をついた。

そして、タバコの吸い殻が一杯になった灰皿をテーブルに残し、税関前の海峡沿いの遊歩道を歩き出した。海から吹いてくる潮風は8月の太陽の熱さを和らげてくれるほど優しくはなかった。吹き出てくる汗を拭いながら、何の目的もなく潮風が吹いてくる海峡沿いの道を歩いていた。

大型船の係留用に作られたフック型をした鉄の塊に腰を下ろすと、シャツのポケットからタバコを取り出し、風を避けながら慎重にライターで火をつけた。

「あれから20年、街も俺もすっかり変わってしまった」

小林はあの日以来、涙を流したことが無かった。感情という感覚を捨て去ることが、事件を自分の中で風化させていく一番の方法だと考えた。そしてそれを実践していた。街もレトロ観光の開発で変わっていった。薄汚れた倉庫街は取り壊され、その跡地にはホテルやミュージアム、高層マンション、洋館のレプリカ群が立ち並んでいる。そして観光客目当てのショッピングモールの賑わいとは関係のない、レトロ観光区から離れた昔からの商店街は、シャッター通りへなろうとしている。

それは時代の流れで仕方のないことなのかもしれない。かつては大陸への玄関口として栄えていたこの街も、戦後の経済復旧の中で置き去りにされていった。そしてレトロブームのおかげで街は賑わいを取り戻しつつあった。

小林が好きだった門司港の街は洋子と共に消え去ってしまった。

そんな小林の感傷を包むかのように、『門司港駅』は昔ながらの威厳を残し、街や人々を優しく見守っていた。